清規

飯食供養の心得

◎下駄の揃へやうにて其家庭を知り、衣服の着やうにて其人格を見ることが出來、小なる事の上に其人の心掛けは多く發露するものである。最も小事に拘はらざる放膽的な禪宗に於ても清規を設けて坐作進退の小事を律せるは小道德の如何に修道に必要なるかを示せるものではないか、典座教訓にいふ。

禪苑清規にいふ、二時の粥飯、理すること清豐なるべし、四事の供（衣服、臥具、飲食、醫藥、）須らく闕少せしむるなかれ、世尊二千年の遺恩、兒孫を蓋覆す、白毫光一分の功德受用不盡なり、然あれば衆に奉ずるを知て、貧を憂ふべからず、若し有限の心なくんば自ら無窮の福あらんと、蓋し是れ衆に供する住持の心術なり、供養の物色を調辨するの術は、物の細を論ぜず、物の麁を論ぜず深く眞實の心敬重の心を生ずるを詮要と爲す。

洗面の法

こあつて飯食供養の心得を示し、

醍醐味を調ふるもまた必ずしも上と爲さず、菁菜羹を調ふるも未だ必ずしも下こ爲さず、菁菜を擇ぶの時、眞心、誠心、淨潔心にして醍醐味に準ずべしといひて調理に誠心の必要を說き、辨道法には洗面の法を示して、

洗面の法は手巾を用て頸に掛け、兩端前に垂れ、次に兩手を以て各々其一端を把て左右の腋下より背後に至らしめ互に兩端を相交へて又兩腋下より面前に至らしめ胸に當て結定せよ（中略）次に楊枝を執り合掌して、

◎手執楊枝、當願衆生、心得正法、自然淸淨、

と卽ち楊枝を嚼み誦して曰く、

晋嚼楊枝、當願衆生、得調伏身、噬諸煩惱、

此くの如く一擧一動に佛者の心得を示し、赴粥飯法に於ては食事の規律を說く衆寮清規に於ては同寮中に修道するもの〻守るべき道を示し、

寮中他人の案頭に到て他人の看讀を顧視して乃ち自他の道業を妨ぐべからず

雲水の最も痛と爲す所なり。

寮中威儀を亂すべからず、合掌し問訊すること當に如法なるべし、聊爾なることなかれ、凡そ一切時、法を輕んずべからず。

寮中、遺落の物を見ば拾遺の牌を繫くべし。

蓋し此小規律を守る所が、彼の大洒脫の行はる〻所以ではあるまいか。

◎雜感數則以て小なる道德を說く、これ小か、終に小にあらざるなり。小にあらずといへども小規せらる〻道德である。記して疎懶の吾、自からを戒むるの箴とするのである。修道の士、亦これを小規することなくんば幸である。

六　修道漫錄

奢侈を戒む……衣食住……行誡上人……仁王禪……鈴木正三の禪風……
雲居禪師……乞食桃水……迷ひの本……敵と友……提婆の死……友道……
……財を惜む……金と人……己が影……狂歌問答……法衣……動中修養……
……無常迅速……和歌と俳句……一日暮し……時の區劃

澤庵禪師の垂誡

◎澤庵禪師は德川家光の歸依を得た近世の高僧であるが、師曾て將軍並に諸侯を戒めていふ。

衣食住居に結構を盡す世ならば、世間つかるべし、如何となれば、金銀足りて結構する人は百人あるべからず、百人に五人はあるべしと思へども、千人に五十人、萬人に五百人なり、然れば萬人あつて其中五百人金銀足る人これあるべからず、百人に一人ある時は則ち萬人に百人あるなり、福人の結構を盡すは左もあるべし、それ奢りは大和も唐もきらふたることなり、萬人の中百人は餘りあつてする結構なり、九千九百人は福人にならうて及ばざることをする故に、世間の心疲る、其金銀足りたる百人の方を押へて、奢りを止めさせたれば自ら萬人ともに奢りを止めて世は安かるべし、世間のつかれ、人の惡心になり、屋燒、人殺をするも、其本を尋ぬれば侈りに事足らざるより起るものなり云々。

奢侈の弊害

これ實に萬人中の百人を押へて奢侈を戒めた活手段である。

◎支那明季の大德雲棲大師が日常警悟の爲めに坐右の箴とせられた詩に、

屋可レ蔽二風雨一　何苦鬪二華麗一　堯舜古聖君　光宅天下被

茅茨未二嘗剪一　土堦亦不レ砌　不レ知爾何人　鱗々居二大第一

と、こは慈受深禪師の作であるといふことで、居宅の華麗を衒ふものの頂門の一針である。食、器、衣に就て大師自作の詩がある。

食可レ充二饑腸一　何苦尚二腴靡一　孔顏古聖師　悅レ心飽二義理一

一簞復一瓢　飯二蔬食一飲レ水　不レ知爾何人　肥甘滿二砧几一

こは食に就て戒めたるもの、日常使用の器具に就ては、

器可レ足二使令一　何苦作二淫巧一　釋迦三界師　萬德備二文藻一

一持二鉢多羅一　四綴猶未レ了　不レ知爾何人　盃箸嚴二七寶一

衣に就ては、

衣可レ蓋二形體一　何苦競二文飾一　迦葉首二傳燈一　聞譽千古溢

頭陀百絆鶉　老死終弗レ易　不レ知爾何人　儼身皆綺縠

こ事々に接し物々に應じ爾何人ぞと反省するは、これ修道の心得である。

◎行誠上人の道歌

行誠上人は明治の高僧中、殊に傑出せられたるお方で、其詠みすてられし和歌の中にも吾等が修道の技折たるものは少なくない。

ならはじな澤邊の蟹の横にのみ
行けば行かるゝ道はありとも。

塵の世を梢こなして木づたふは
何のこゝろのやまざるぞこれ。

水かゞみくもるこ見しは影うつす
はなにかすみのたなびけるなり。

こりずまにうちはよせても岩が根に
　おのれくだけてかへる白なみ。

一ふしもあらで我世はすぎぬらし
　何をまなびの窓のくれたけ。

世の中はながれ渡りの舟なれや
　くだるぞ棹はさしよかりける。

春の花秋のもみぢのいろ〳〵も
　世にいつはらぬためしなりけり。

吹きはらふためには吹かぬ松風に
　おのれ消えゆく峰のうき雲。

などいと多し、曾て神奈川に宿して、和歌に誇りて淑徳を缺ける女性を戒めて

歌をよむ女房なぞはもたぬもの
　亭主をしりにしきしまの道。

と云はれしなぞ、洒脱の風の慕ふべきものも亦多いのである、政界の名士、小野梓氏は上人の德操に敬服し、人に語りて「上人にして政治家たらしめば、必らず不世出の大政治家たらん」というたといふことである。

◎石平道人鈴本正三は德川の幕下に屬し、大阪陣にも出た勇士であるが、後僧となりて盛んに二王禪なるものを唱へて盛んに武士道を鼓吹した、左に掲ぐるは其一節である。

一日示して曰く佛道修行といふは、二王不動の大堅固の機を受けて修するこ

こ一なり。此機を以て身心を責滅するより外別に佛法を知らず。若し我が法に人らんと思ふ人は、機をひつ立て眼をするゑ、二王不動、惡魔降伏の形像の機を受け、二王神を守て、惡業煩惱を滅ぼすべし、古來より此佛像の沙汰したる人聞かねども、如何にしても、我が胸に相應して、用ひて萬事に自由なり、佛は勇猛精進で、諸經に多く說きたまふと見えたり、此機を受けずして煩惱に勝つことあるべからず、第一に佛像の機を受くるこいふことをよく知るべし、無稽にして此機移るべからず、專ら佛像に眼を着けて二六時中金剛心を守るべきなり。

正三は禪に於て此二王不動の堅固をいへるのみならず、人の念佛の申し樣を問ふに答へて、

機をぬかさぬこと

眼をするゑ、拳を握り、きつと胸を張り出して、なまいだ〳〵と申さるべし。常住如是に用ゐずんば用に立つべからず。

こいひ、さて、

修行といふは機を拔さぬこと一つなり。喩へば機を拔したる時は、大勢にときをどつと揚られ、こは其儘機を取られて、ぐつといじけるものなり。機を拔さずに居る時には、大勢にわつと云はれては、其儘その聲に乘つてわつこ云うて懸らるゝものなり。大勢の聲が却て味方の力になるものなり。何たる强者なるとも、機を拔して居らば二の息に成るべし、又拔さず守り居ん時思ひ懸なき處にて、人わつと云へば、其聲に乘つて、わつと驚く心少しもあるべからず。

と、これを正三の鯨波禪ともいうて、武士の修養には缺くべからざることゝ傳へられて居る。これは啻に武士の修養のみならず。何事に就きても此機を拔さぬこいふことが膽力を養ふに必要なことである、正三は此機を拔さぬ修養を以て人を化したので其手段頗る惡辣なものがあつた。左に驢鞍橋に示す所により て二三を擧げん。

◎在俗の日の友に辻斬りを好むものあり。正三の之れを戒めたる手段は眞に意表の外に出づ。

去る時師彼に向て云ふ。其方は辻斬をなすといふが、定めて虛なるべし、辻斬はなし得べからずこありければ、彼の人云ふ、如何にも斬るなり。師いや辻斬ではおじやるまい、辻斬はなるまじと云ひ給へば、彼の人出て、さらば斬て見せ申さんと云つて、同道にて行き、人離れなる所に影取て居られたり時に町人二人通る也。彼の人出て斬らんといふ、師曰く、是れは無用なり。我指圖するものを斬らるべしと留め給ふ。其後又千石計取る風情の人通るときに、師いざあれ斬れと云つて、既に出んとし給ふ。彼の人驚き、扨て〳〵そこつなる人哉と云つて、取留めて出でず、師曰く扨て〳〵でかい腰拔かな我は斬らんこいふ、其方腰を拔して斬り得ず、腰が拔けては辻斬はならぬものなりと申したるは是れなり。如是の人を斬り得ずんば向後辻斬は無益なり先の樣なるものを斬るは、比丘尼法師斬りたる同然なり。侍たる者がかやうなもの斬るものかと耻かしめ給へば彼の人大に非を知り、一腰を拔き、かねうつてふつつと辻斬をやめられたることあるとなり。

（驢鞍橋）

かねうつとは金打のことにて誓を立てゝ辻斬を止めたのである、又何某殿語て曰く、先生吾女共死せし時、朦氣して途方に暮れたり。時に正三廣間の口に出で、その廢物早く持去て打捨てよと、高聲にて下知して寺に遣し給ふ。この聲を聞くといと心開けて胸安くなりたり云々。

其手段の惡辣なる眞に秋霜の如きものである。

一日何某殿來て曰く、所司代に彩成候へば、心隙なし。如何にしてか安心を得候はんや、師忙き故を問ふ、彼の人曰く、様々家人共と公事を工み、互にさばきつ、さばかせて錬磨仕るなり。師曰く、左様に物を工み居て、事の埒明くべからず、唯心をばつしと用ゐ、一切を吐出して、常に隙にて居給ふべし。扨て沙汰を持ち來らば、ぬんと用ひて一物なき心にて、双方の是非を聞かるべし。若し然らば鏡に影の寫る如く聞くと早く胸にて自ら埒明くべし。總て私の贔屓あるを以てさばき得ぬものなり。正直にさへさばかば、何の隙も入らぬことなり。兎角くこついてはさばかるべからず、若しさばき損せば罷出て腹切んずと思ひ定め、我心一ぱいに是非に任せてさばき給ふべし畢竟平生心を守ること肝要なり。

と云はれたといふことである。

◎雲居禪師の行蹟は頗る興趣に富む、其若狹にあるや、面白からざることのありければ、壁に

三毒生時双眼暗、　萬緣脫處一身安、
衲僧行李只如是、　傘下杖頭天地寬、

の一偈を遺して去り、奥州の白川に寓せし時、出でて仙臺に遊び、途上伊達政宗の來るに遇ふ、雲居、田畝の間下りて蹲踞するを政宗其相を異とし、そこにつくばい居るものは何者と問ふ、雲居曰く、これは白川に寓する僧にて候こ、政宗笑て白川にてはあるまじ、色が黑いこ、雲居直に住みなれまして候と、政宗此一拶に歸依の念を起し、招くに瑞巖を以てしたれども應ぜず、後、政宗死し、其子忠宗が父の遺囑によりて招くに及びて、終に之れに應じた、已に應じたがなか〳〵出立しない、そこで臣下の片倉小十郎が其故を問ふと、いや別儀でない前日釜を市人に購うて未だ其代を拂はないから四五日行乞をして其の債を償ひ、而して後に赴かんといはれたのには、小十郎も大に其虛心に服したといふことである。

◎桃水は洒脫を以て聞えたる曹洞の異僧である、身を乞食の群に投じて敎化自在であつた、桃水に歸依した一人の尼があつて、國を出でて桃水を尋ね廻り、京の四條磧に來りし時、たま〳〵孤うちかつきたる僧の乞食の病めるを介抱せるを見るに、年頃尋ねる桃水なりければ、尼いとよろこびて、背に負ひし臥具を取り出して贈りけるに、桃水は今の身にては用なしこて受けず、尼とにもかくにも心に任せたまへ、師に供養する上は直に棄てたまふとも苦しからずこいふと、桃水はさらばこて、そは病める乞食に打着せて飄然こして其他を去つたといふことである。權貴の招聘を避けて下層に慰安を與へたのは、師が生涯の働きであつた。曾て偈を作りて弟子を戒めて、

如是生涯如レ是寛、　弊衣破椀也閑々、

飢餐渴飲只吾識、　世上是非總不干、

盤珪禪師

◎盤珪禪師も亦近世の高僧で、播磨の人、勅諡を大法正眼國師といふ國師曾て

迷の本

迷ひの本を說て、

一切の迷は、皆身のひゐきゆゑに迷を出かす、身のひゐきさへせねば一切の迷は出來はしませぬわいの。たとへば隣の人が喧嘩をしますればこちらは非分、こちらは道理といふことを、明かに分れてきこえますれども、我方にからぬことなれば、きこゆるぶんで、我が腹はたちはしませぬわいの。もしまた我が身にかゝれば、身のひゐきをいたすゆゑに、むかふのものにこもあうて、佛心をつひ修羅にしかへて、互にせめ合ひまするわいの。或は又佛心は、靈明なものゆゑに、從前の我がなし來つた程の影はうつらぬといふことは御座らぬわいの。そのうつる影にとんじやくすれば、つひまた迷を出かしまするわいの。念は底にありて、おこるものではござらぬ、從前見たり聞たりした事の緣によつて、その見たり聞きたりしたるが移るといふもので御座るわいの。もとより念に實體はありはしませぬによつて、移らば移るまゝおこらばおこるまゝに、やまばやむまゝに、そのうつる影にとんじやくさへせねば、迷は出來はしませぬわいの。こんじやくさへせねば、まよわぬがゆゑに、何程影がうつりても、移らぬとおなじことで御座るわいの。たとひ念が百念千念きざし起つても、おこらぬこおなじことで、少しも妨げにならねばはやう念斷する念といひて一つもありはしませぬわいの。

と、眞にこれ迷ひの根本を道破したものといふべきである。師の句に

人は友と敵となかるべからず

帥よ木よ汝に示す今朝の露

といふがある、其寂せんとする時に、弟子達が遺偈を請へば、住世七十二年、度世四十四年、平生、汝等に示し來りしもの皆な老僧が遺偈なり、今死に臨んで殊更らに云ふべきことあらんやと云はれたといふことである。

◎ソクラチースいふ「人は友と敵となかるべからず、友は我れに忠言を與へ敵は我れに警戒を與ふ」と、世に憐れなるは友もなく敵もなきの人である。我れに慰安を與ふるものは友で、我れに奮發の心を起さしむるものは敵である。されば敵を敵とする勿れ。汝の敵は却て汝が敵とせざる所にあらん。若し夫れ怨親平等の觀に住し、心を向上の一路に遊ばしむるを得ば更に妙なるものあるに至るのである。

提婆菩薩

◎提婆菩薩は紀元三世紀頃に印度に出た高僧で篤く佛教を信じ、一國を教化し王都の中に高座を設け、揚言していふ、八方の諸論士、若し我が說を破るものあれば首を斬りて之れを謝すべしと、婆羅門教の徒之れを屈せんとするも一人のよくするものなし、終に提婆が獨閑林に靜坐せるに乘じ刀を執りて之れを刺す、提婆之れに告げて曰く、汝速に此處を去れ我が弟子中未だ法忍を得ざるもの汝を捕へん、汝宜しく山上に逃るべし、平地に下るこなかれと、刺客蒼皇として去る、提婆の弟子來りて師を見、直に敵を索めんとす、提婆徐ろに一切諸法空にして受者なく害者なきの道を說て寂然として死んだといふことである。眼中一人の敵なく道の爲めに死す。千歲の下欣慕すべき行動ではないか。

荀巨伯

◎友道に就て傳ふべきは晉の荀巨伯のことである。胡賊郡を攻めて一郡皆な逃

る。伯獨り去らず、賊いふ大軍あり一郡空し、汝何ぞ獨り止まるやと。伯いふ我が友に疾めるものあり、我之れを棄つるに忍びず寧ろ我が身を以て友の命に代らんとするのみと。賊大に感じて軍を旋らして還つたといふことがある、友としては實に此くの如くならねばならぬ。因果經にいふ。

朋友たるに三種の要法あり、一には過失あるを見ては趣ち諫め曉し、二には好事あるを見ては深く隨喜を生じ、三には苦厄にありて棄てず。

と、シセロはいふ、「朋友なき生涯は太陽なき世界の如きか、何となれば神の與へたるものにして之れより善きものはなく又之れより樂しきはなし」と、さて如何にすれば樂しく交るべきか、マーカスオーレリアスはいふ、「汝は己れを樂ましめんと欲せば、汝と共に生活する人の美德を思へ、何となれば美德の我が死せる所の人に於て顯はるゝを見るより樂しきはなければなり」と他人の美を美とする我が美の如く、他の惡を許すこと我が惡の如くにして友情はこゝに濃かなるを得るのである。

◎圓覺寺の佛源禪師は信徒の施物を畜積し、一々之れを甕の中に入れて少しも出さず、世人は見て以て出家に似合しからざる吝嗇漢として居つたが同寺が火災に罹つた時に悉く財を出して再建の費に供し、君子は財を惜む之れを用ふるに道あればなりと云はれたといふことである。用ふるに道あるが故に惜まねばならぬので、これは啻に財貨のみではない、身命も亦此くの如しで、楠正成が、

身の爲めに君を思へば一夕心

君の爲めには身をも思はじ

というた如く、君の爲めに使ふべきものであると思へば平生之れを愛惜せねばならぬ、猛勇を誇りて身を惜まず。磊落を衒うて財を惜まざるは眞に道に志すものゝ行ひではない。

人と金

◎昔、希臘のアゼンに一人の男があつて、美しき娘を持て居つた、これに結婚を申し込んだものに貧しき學者と富める愚物とがあつた、いづれに與へんかと心迷ひて時の大政治家セミストクリスに問うた時にセミストクリスは、そはいふまでもなきことなり、結婚は人と爲すべきものにして金と爲すべきにあらず人に與へよ、金に與ふる勿れこういうたといふことである。今の世には金に眩みて人を忘るゝものが多い。

己が影

◎佛經の中から出ていろ〳〵に作り變へられ世に行はるゝ話が、我が國には殊に多いが、其中でも左の一話の如きは子供のお伽噺ともなつて、誰れも知らぬものはないが、其源が雜譬喩經にあることは知るものが少い。

昔し長者あり、新に婦を迎へ、甚だ愛敬しぬ。夫一日婦に命じて、厨の中に入り酒を取り來らしぬ。婦往て瓮を開き、自らわが影の瓮の中にあるを見て更らに女人ありと思ひ、大に恚り、還りて夫に語りていふ『卿さきに婦を有ちて之を瓮の中に藏し、復われを迎ふるはいかに。』夫爲に自ら厨に入りて、瓮を開き、また己が影を見て、却て其婦を恚り、その男子を藏せるを疑ひ、二人更に相忿恚し、各々自らの見る所を以て、實と爲し、鬪諍已まず。時に一梵志あり、長者と親厚し。偶々夫婦の爭ふを見、其處由を問ひ、往てこれを

視て、また我が影を見、長者が他の親厚のものを藏し、僞りて爭ふの狀をなすものゝ思ひ、恨みて捨て去りぬ。また一比丘尼あり、また往て瓮の中に他の比丘尼あるを視て、これも恚りて捨て去りぬ。須臾にして道人あり、また往て之を見て、其影にすぎざるを知り、喟然として嘆ずらく『噫世人の愚惑の甚だしき、一に何ぞこゝに至る』夫婦を喚び來りて告ぐ『われ卿等の爲めに、瓮の中の人を出さん』こて、一大石を執りて酒瓮を壞り、以てその實の有るなきを了せしめぬ。

これが松山鏡なぞというて世に行はれてをる話の源であらう。

狂歌問答

◎一休禪師、一日住吉のほとりに遊び、和歌を咏じて、

來て見ればこゝも火宅の宿ならめ
何すみよしと人のいふらむ。

と、臥菜庵の老僧、之れに返して、

來て見れば爰も火宅の夜なれど
こゝろをさめてすめば住吉。

と、又或るものゝ本に、一休、高野に遊びて弘法大師が奥の院の窟中に定に入れりと聞き、

弘法は虛空の定に入りもせで
心狹くも穴に入るかな。

といひし時、弘法、窟中より聲に應じて、

人りぬれば虛空も定もなきものを

心狹くも穴と見るかな。

というたとある。これらは勿論後人の作意であらうが、禪の要旨を示すに足る話である。

◎永平道元禪師が紫衣を賜ひし時

永平雖二谷淺一　勅命重重々　却被二猿鶴笑一　紫衣一老翁

と云はれたことは何人も知つて居る話であるが、祖範院谿上人も亦紫衣をたまひし時、

雲ならばうれしからまし紫の
ころもの色をかりそめの世に。

と云はれた、名利に淡きこと水の如しともいふべきである。これに就て面白きは一休禪師、或る時、法衣を纏はずして齋に行きたまふ、人怪みて尤めければ

着たりとよ心の中の墨染を
世わたり衣上にこそきね。

と云はれたといふことである、世渡り衣とは能くも喝破せられたものではないか。

◎古歌にこれあり、

なか〳〵に山の奥こそ住みよけれ
草木は人の上をいはねば。

と、先きにも擧げたる二王禪の鈴木正三は之れを見て一字の改めたき所ありとて、

なか〳〵に山の奥こそ住みうけれ
草木は人の上をいはねば。

としたといふことである。徒らに山林に隱遁して安きを貪るは眞に修道のものとはいへぬ。

古人も亦

世路風霜は吾人錬心の境なり、世情冷淡は吾人忍性の地なり。世事顚倒は吾人修行の地なり。

動中の修養

こいひて動中の修養初めて其眞機を得べきを示して居る、行も亦禪、坐も亦禪程明道詩あり、

閑來無事不從容　睡覺東窓日已紅
萬物靜觀皆自得　四時佳興與人同
道通天地有形外　思入風雲變態中
富貴不淫貧賤樂　男兒到此是豪雄

こ、、大丈夫須らく此境に入るべきである。大鹽中齋いふ、

物に繫るものは常に動く、況んや變に逢ふをや、地に安んずるものは變に逢ふといへども動かず、況んや常をや、是の故に止る所に於て止るを知らざるべからず。

と、安立の地を得て、而して變に處し機に應じ自在なる事を得るのである。

◎無常迅速、生死事大、獨逸の文豪シルレルいふ。吾等の失ひたる瞬間は永久之れを待つも還ることなしと。されば行はんと欲する所は直に行へ、速に行へ

ゲーテもいふ、汝にして眞に熱心ならば後と云はず、直に爲すべきを爲し、始むべきを始むべしと。躊躇と逡巡とは修道を妨ぐる最も甚しきものである。

◎或る人大無量壽經の要文八句を俳諧の發句に作りて其意を述ぶ、

天下和順　日月清明
天地の間和らく春日かな。

風雨以時　災厲不起
寛にも水の程よき青田かな。

國豐民安　兵戈無用
廣々と稲干してあり古戰場。

崇德興仁　務修禮讓

御佛事や年貢あまりて茶の子餅。

又或る人が道元禪師の發菩提心に歌註を施したのがある。一二三を示せば

菩提心者多名一心也

難波潟言の葉しげきよしあしも
同じ名におふ伊勢の濱荻。

古來得道得法之聖人、雖レ有二同慶之方便一　未レ有二名利之邪念一

染るとも思はずながら村時雨
すぎていろこき秋のもみぢ葉。

法執尙無、況世執乎

あら磯の波にくだくる月かげの

手にもとるべきあこあらばこそ。

迷者執之、悟者離之

もこよりもほどけてあるを白糸の
結ぼれとけぬおのが小田巻。

など趣味あるもの多し。

一日暮しの戒め

◎北山壽安は黄蘗の僧にして、かねて醫を業とし、資性寡慾、財餘あれば悉く貧民に施す、曾て尾張侯を診して多くの財を得たる時、門前に墨黒々と貼り出して「債主速に來れ、然らずんば貧民に施さん」と性行以て推知するに足らん。壽安作る所の一日暮しの戒めなるものがある。曰く

一日暮しといふこと覺悟せしより、精神甚だすこやかにして、又養ひに術を得たり、いかんこなれば、一日は一月のはじめ一年のはじめ、千歳萬歳のはじめなれば、一日よく養ふ事を得たれば生涯をやしなふも難きにあらず、其一日暮す程の勤を成せば、其日過なり、夫をあすはどうして、かうしてとまた相手もなき事を苦にして、しかも明日にのまれ、其日はをこたりがちなり、終に明日に至れば、又明日を工夫するは、全體持越して今日をなきものに思ふ、故にいつも心氣を遠に費し精神を勞す、こかく明日の事は命のほども覺束なしといへばこて、今日の産業を麁末にせよとにはあらず、今日一日くらし中の勤めを勵み行ふべし、たとへいかなる苦みとても、一日と思へば堪られぬべし、樂も又一日と思へば、溺るゝこあるまじとなり、予是を聞きて大に感じぬ、實にや愚かなるものゝ、親に不孝なるも永しこ思ふゆゑなり、

かへらぬ昨日
しらぬ明日
の日

君に忠をなすも是に同じ、一日一日と思はゞ退屈はあるまじ、日に新にして又日に新なりといへるが如く、心術の上も一日々々と修行して、今日も目出度修行せり、又今日も目出度修業せりと云ふこそよけれ、日課なども今日一日々々と勤れば百萬年勤るもやすし、何事も一生せねばならぬと思ふから大義なり。一生と云ふは決して永きやうに思へど後の事やら、明日の事やら一年二年乃至百年の事やら誰も知る人あるべからず、死を限りと思へば、一生に欺れやすし。

さしあたる今日の事のみ思へたゞ
かへらぬ昨日しらぬ明日の日。

亦これ修道の一工夫である。

◎予曾て年頭に際し、左の一文を稿して懷を述べたことがある。掲げて修道の資に供す。

○何爲ぞ人の子の小細工を好む、無限の時間に小區劃を試みて、日と云ひ、月といひ、年と云ふ、天地は悠久なり。生滅去來の相あることなし。流に浮ぶ水泡の小を以て茫漠たる宇宙を忖る、愚といはむか陋といはむか。

○されど人は到底自己の有限を自覺せずには止まじ、已に之れを自覺す、勢ひ已れの小を以て天地の大を觀ぜざるを得ず。小區劃は益々小となり、日は二十四分せられて時となり、時は六十分せられて分となり、更らに六十分せられて秒となり、乃至瞬間となり、刹那となり、この一刹那の中九百の生滅ありといひ、この生滅の中尚ほ生住異滅の四期を存すこなすにいたる。

憐れなるかな人

○この刹那積んで六十四億九萬九千九百八十となつてこゝに一晝夜となり、これを日と名け、日三十にして月となし、月十二にして年となり、年五十にして七十は古來稀れなるをもつて人の一生とす。これ自らその小なるを慰めんが爲めに、小を細分して漸く自ら大ならんこせるにあらずや、憐れなる哉、人、刹那の小を語つて漸く生命の長をいふべし。

歳始歳末

○一年三百六十六日これを天地の悠久なるに比すれば短こいふべきも之を刹那の短なるに比すれば此間二萬三千百六十億刹那、長からずとせず、人の歳始を祝し歳末を悲しむもの所由なしといはむや。

○歳始歳末は人生の一區劃なり、希望を以て迎へ追悔をもつて送る希望に樂調あり、追悔に悲音あり、されど希望のよろこぶべきが如く追悔も亦喜ぶべし。

追悔の心は向上の第一歩

歳始を祝し歳末を祝す、人は究竟樂天の子なり。

○人生悲むべきは追悔の心なきものなり。追悔の心は向上の第一歩なり。奮勵の第一階なり。向上奮勵もつて理想に近づくべし。俳人許六いふ。上手になる道筋慥かにあり、師によらず、弟子によらず、流によらず、器によらず、畢竟句數多く吐出したるもの丶昨日の我に飽ける人こそ上手なれこ、これ俳句に就ていへる言なりといへども、亦もつて世上萬事の箴たらしむべきにあらずや。

昨日のわれに飽く

○『昨日のわれに飽く』これ處世の規矩にして修養の根柢なり。哀れなるは昨日の我れに飽くなくして滿足を過去に夢みるの徒なり。滿足を過去に夢みるものには奮鬪の志望なく、向上の精神なし、眞に是れ浮世の廢物。

先づ失敗すべし

○これこの輩には順應あつて奮鬪なく世と推移して醉生夢死す、失敗なしといへども、成功なきなり。吾人の世に處す須く先づ失敗すべし、失敗失敗又失敗七顚びは八起きの基『畢竟句數多く吐出したる者』終に成功の時あるべし。

○濱邊に立ちて對岸を見よ、一葦帶水、其中間を遮るものなからんか指呼相應ずべきが如し、吾人の過去を追想すれば猶ほかくのごとし。

きのふこそ早苗とりしかいつのまに
稻葉そよぎて秋風ぞふく。

その近きこと對岸を見るが如し、されど若しこの中間に白帆あり汽船ありて吾人の眼界を妨げんか、對岸はいと遠く望まるゝにあらずや、過去は近きが如しと雖、其の間に何等かの事業を劃せんか、短かきも長く、近きも亦遠く感ぜらるゝにあらずや、よしその事業は失敗なりしとも、その船は破れたりとも。

人は事業の爲に生る

○人は事業の爲めに生れたり。成敗もとより論ずるに足らず、これを爲さずして空寂の生を送るものに比しては失敗も亦過去を飾るの榮譽にあらずや。

妙なる人

○三百六十五日短しといへども、事業家にとつては二萬三千億の刹那たるべく空寂の生を送るものには一夢に過ぎざるかな、妙なる哉人、悠久の天地に此小區劃を施して奮勵の箴とせること。

日々又一日、吾等は小より大に、卑きより高きに堅固の信仰と不斷の努力とを以て進まむとするものである。

◎小なる動物に愛憐の情を寄せるほど、人の心の美しきを現はすものはない。

俳諧寺一茶の句に最も此の種のものが多い。其の六歳の時、

我と來て遊べや親のない雀。

と吟ぜしは人口に膾炙する所にして、

痩蛙負けるな一茶こゝにあり。

人聲に子をひきかくす女鹿かな。

脇へ行くな鬼が見るぞや寒雀。

寐がへりをするぞ脇よれきりぐ〳〵す。

留守の中靜かに遊べ庵の蠅。

叱られて又はいる鶏のいぢらしや。

の如き洒脫の中に無限の情趣あるを覺ゆ、一塵法界を盡くし人情の美も亦此の短句に收まる、修道も亦此の如きもので、上來しば〳〵いひし如く、小の中に大あり、小終に小にあらずである。こゝに法句經の聖誡を引用して修道漫錄を結ぶ。

莫下輕二小惡一　以爲上レ無レ殃　水滴雖レ微　漸盈二大器一

凡罪充滿　從レ小積成　莫下輕二小善一　以爲上レ無レ福

水滴雖レ微　漸盈二大器一　凡福充滿　從二纖々一積

國運の發展

下編

一　國家と人道

國運の發展……文明の發展……國王の十德……地方自治……國家と地方……戊申詔書……自治の精神……自覺……自護、自制、自奮……共同の精神

國運の發展といふことは、戊申詔書の一大主旨で、何人も是を望まぬ者はないのであるが、其國運の發展といふ事は、如何なる事であるかといふ事を考へると、是れには有形上の發展と、無形上の發展との二つがある。有形上の發展といふのは一つは人口のふえる事で百萬より千萬、千萬より一億と人のふえて行くのは國運の發展に相違ない。其次は領土の擴張で自國の領分が段々廣く

有形上の發展

なるといふ事は、是も亦國運の發展に相違ない。此二つを通常發展といつて居るのであるが、併し是れだけではまだ眞の發展といふ事は出來ない。即ち其他に於て尙ほ無形上に於ける文明の發展といふ者がなければならぬ。いかに人口が殖え領土が增しても、其國民が無智文盲であつたならば、それは正當の意味に於ける國運の發展ではないのである。國民の發展は智力も增進して商業も繁盛に赴き、世界各國に對し耻かしからぬものとならねばならぬ。

無形上の發展

然らば今や我が日本の國は是れを古來に比して、國運が發展したといはるゝか、何うか。先づ人口の上から見ると昔から日本國民即ち大和民族の事を、天の益人といふて、人口の增殖には非常の速力を以て居る。ごく古い事は不詳ぬが、今より一千三百有餘年前、推古天皇の十八年即ち聖德太子の時代の計算に

人口の增加

依ると、當時日本人の數が四百九十八萬八千人あつたらしい。其の後菅原の道眞公の時代に至つては、殆んど倍加して八百萬人となり、それから後は世の中が亂れて、人口の計算も明かでないが、ずつと降て德川時代となつて六代將軍吉宗の時には二千五百萬人、十一代將軍家齊の時には二千七百萬人になつた。それが段々增加して、明治の御代になつて三千萬とか、四千萬とかいつて居たが今日では五千二百萬の大數に至つたし、領土の方からいふと、桓武天皇の時代までは、今の本州全土が日本國といふことも出來なかつたらしく、彼の有名な多賀城碑文には蝦夷國境を去ること一百二十里と有る。其の時分の一里は六丁であるから、百二十里といつても大約二十里しかないのである。假りに多賀城の碑を、今の陸前の宮城郡に在つたとすると、陸中の陸奥は蝦夷の領分で有つ

たらしい。坂上田村麿の東征の結果、漸くそれが日本の領分になつたのである

領土の擴張

が其後戰國時代になつて、西南の方は琉球が島津家と交通し、東北は今の北海道地を經營せられて、大分領土が增し、維新以後には、まづ琉球が我が物となり、日清戰爭の結果臺灣之れに加り、日露戰爭の結果樺太の南部又我が有となり、それに韓國を併合し、滿洲に於ても利權を得る樣になつたから、領土も亦擴張せられたといふことが出來る。則ち人口と領土の兩面からいふて國運の發展といつてよいのである。

文明の發展

更に文明の發展は如何であるか。凡そ一國文明の發展といふものは太古の時代に於ては、一國は一國づつ漸次に發展して行くのであるが、世の開けるに隨ひ他國との交際が始り、其文明をも受くる事となりて、それを受けて國民固有の文明に培ひ、遂に瀾漫たる花を開く樣になさなければならぬ。日本には日本固有の文明があつた。併しそれ丈では到底完全のものではない、然れば培ふのに支那印度の文明を以てし其長を取り短を棄てゝ悉く是れを自家のものとし、茲に萬國無比の國體を構成した。世界いづれの國でも他國の文明に接觸する時にいたづらに之を模倣して、少しも自家の選擇を加へないものは、遂に其國を亡してしまふし、又他國の文明を取つて自己の用となす同化力のないものは、是亦世界の進運に伴ふ事はできなくなる。我日本には外國の文明を取つて、自分の國のものとす同化力もあり、又其長所を取て短所をすてるの選擇力もあつた。此同化力と選擇力とが、日本の國運を發展せしむるものゝ素因となつたのである。

同化力と選擇力

維新以後日本が西洋の文明に接觸するに當つては、無暗に彼に同化して國民固有の元氣を失うでもなく又頑迷固陋に外國の新來の文明を排斥するでもない即ち長を取り短を棄つる選擇力によりて、全く日本の物となさずんば止まないのである。我國運は斯くの如くにして發展して來た。則ち是れを圖表すれば

國運の發展
- 有形
  - 人口の增殖
  - 領土の擴張
- 無形（文明の發展）
  - 自國文明の保持
  - 外國文明の發展
  - 同化と選擇

併しながら尙ほ今日の狀態を以て未だ充分のものとも思はれない。武力に於ても能く支那四百餘州を風靡し又世界の强國たる露國を屈伏せしめたが、金力

金力と智力

はどうであるか。それは言ふまでもなく、歐羅巴各國に比すべきでない。智力即ち教育の程度學力の進歩も、亦到底世界の第一等國と稱する事はできない。一國の文明をして發展せしむるのには、單に武力のみではいけるものではない是れに伴ふ金力智力を要する。此點に於て未だ充分でないならば、尙々此上の發展を要するのである。

今日の日本は兎に角世界の文明國に列せらるゝので、其是あるに至つたのは抑も誰のお蔭であらう。萬國各々其風が異なつて、建國の事情も同じくないが我日本は　皇祖皇宗國を肇め給ひ、歷代の聖主、御心を國運の發展に用ひ給うて、支那文明の應用も印度文明の應用も、皆皇室が中心となつて、選擇し給ひ又同化せしめ給ひ、我國運の今日あるは實に皇室の力である。心地觀經に國王

國王の十德

の十德といふ事が擧げられてある。今我に當てはめて見ると悉く歷代の御高德と見奉る事ができる。其十德といふのは、

一　能照　とて文明の先覺者となり智慧の眼を以て能く國民の迷妄を破り給ふをいふ。

二　莊嚴　即ち國家を裝飾するので、汽車あり電信ある、今日の文明並に美術工藝の發達も、皆此力の發達である。

三　與樂　即ち國民をして枕を高く、泰平を樂ましむるの德をいふ。

四　伏怨　とて國家に怨なす一切の敵を伏し、內は獨立を經營し外は國威を輝かすも皆な伏怨あるが爲めである。

五　離怖　とて能く難を退け、人民をして恐るゝ處なからしめる。今日我が國民が枕を高く泰平を樂み、生命身體財產の權利を確保せらるゝもの、此離怖あるが爲めである。

六　任賢　こて諸々の賢人を擧げて、是に政事を委ねたまふので、古は賢臣良臣を擧げたまふのみであつたが、今は議會を開きて人民の聲を聞きたまふをも指す。

七　法本　とて法を以て民を泰からしめ、憲法を制定し、國法を定めたまふのみならず、道德の本として敎育勅語を下したまうたのも亦此の法本である。

八　持世　とて法を以て世を保ち、國家存在の目的は國を建て世を持つにあつて、これ陛下の御恩德である。

明治天皇の御事業

九　業主として一切國民の所業の主となり、一切の責任を帶び給ひ民の心を以て心とし民の罪を以て自ら責めたまふ。

十　人主として一切の人民の主となり給ふこと、例へば家屋が柱を以て主とする樣なもので、主權者なき國家の存立することが出來ないのは明かなことです。

此等の德は實に我歷代の聖主を賞へ奉つたものと言ふ事ができる。殊に先き頃神さりませし明治天皇の御事業は悉く此十德を完成し給ひ大慈悲の眼を以て人民を愛護し給ひ、かつては僅かに東洋の一獨立國に過ぎなかつた此日本を、世界の一等國と相並びて遜色なきに至らしめ給ひ、曾ては武士以下の者には學校の設けはなかつた此日本をして、教育の制度到らざるなく野の末山の

小機關の發展を圖れ

端までも、學校の設けあらざるなきに到らしめ給ひしも、皆な天皇の御仁慈の外はないと申より外に申方もない。我々何の幸ぞ、此日本に生れ此聖代に遇ふ。則ち聖旨を繼承し給へる今上天皇陛下の御心を戴く。吾等は此の國運の發展を圖り、陛下御恩德の萬分の一に酬い奉らねばならぬ。

時計の表面は、僅かに大小二本の針ではあるが、其裏面には多くの機械が有る。若し其機械の一小部分でも破損した場合には、直に全體に關係して表面の時間が狂つてしまふ。國家の發展といふ事は、丁度表面の鉢に誤なく運行せしむるに同じく是非地方々々の小機關の運行發展を圖らねばならぬ。唯權力を中央に集注して、地方々々の發展を誤るのは、恰も時計の表面のみに氣を附けて、裏面の機械を忘て居る樣なものである。地方々々は互に負けまいと思つて

都會の發達と田舍の發達

其發達を競ふ内に國家全體の發展となるので、甲の村は乙の村に負けまい、乙の村は丙の村に負けまいと、互に奮發して遂に一郡の發達となり、甲の郡は乙の郡に負けまい、乙の郡は丙の郡に負けまいと思うて一縣の發達となり、又甲の縣は乙の縣にまけまい、乙の縣は丙の縣にまけまいと思ふ内に、遂に一國の發展となるものであるから、地方の發達を忘れて國運の發達を圖るといふのは大なる誤りである。更に言葉を換ていへば、一國には都會もあれば田舍もある。其都會も田舍も諸共に國運の發展といふ大目的の下に奮發力行してこそ眞の文明は産み出される。都會計り發達して田舍の發達せない國は、國民の元氣が沮喪する。田舍のみ發達して都會の發達しない國は未文明の發達といふ事は望み得ない。兎に角地方々々が皆此大目的の爲めに動くのである。それには地方自

地方自治の必要

治といふ事が尤も必要で、國家の要素たる町なり村なるの自治が完成せられずしてどうして、一國の發達が圖られよう。

扨て其地方自治の根柢は、どこであるか。國家の要素が市町村にあるとすれば、市町村の要素は即ち各個人である。されば個人をして自治的精神を養はしむるといふ事は、地方自治の根柢となり、國運發展の基礎となるのではあるまいか。

社會の改良は即ち人心の改良

社會の改良は即ち人心の改良で、國運發展の本も、此人心の改良即ち自治精神の養成より重なるものはなからう。されば戊申詔書の内に、忠實業に服すといはれたのも、勤儉産を治めよと仰せられたのも、荒怠相誡しめと說かれたのも、自彊息まざるべしと示されたのも、皆此自治の精神を勸められたのに外ならぬので、其發展は信と義とにある。即ち

信と義

自治の精神
- 忠實服業
- 勤儉治產
- 荒怠相誡
- 自彊不息

惟信、惟義

忠實業に服すといふ事はまめやかに眞面目に自分々々の仕事をして行く事で表面や人前ばかりではなく自分の心から自分の業に從事するのであり、勤儉產を治めるといふ事は、獨立自活の根本で、勤もなく儉もなきものは世の中の厄介者に過ぎないし、勤があつても儉のないものは、笊の中に水を入れる樣なもので、入るに隨つて出てしまふものである。儉があつて勤のなきものは、水甕の水の樣なもので、汲みだす事がないから腐てしまふ。即ち勤とつとめ、儉こつゝまやかにしてこそ、始めて自治の道は立つ。それを是思はず、いたずらに奢侈に流れ懈怠に耽る時は、遂に產を破つて自活の途が立たなくなるから、荒怠相誡め、自彊息ざるべしとあるのは、現在の位地よりも更に發展せよとの御思召で、此四個條を行ふのに、其の根柢に表裏のない誠心即ち信と其の守るべきを守り其分を盡す義との二つが必要である。殊に此の信は義の本で自分に對しては自ら欺かず、人に對しても敢て欺かずして、共同自治の實を擧ぐるのである。

自治の精神は如何にして養ふ事が出來るかといふのに讀んで字の如く自分で自分の心を治める事で、古歌にも

我心池水にこそ似たりけれ

濁り澄む事定めなければ

我々お互の心は、迷ひ易く狂ひやすく、濁つたかと思へば澄み、澄んだかと思へば濁る。此心を一と處に治めて清なく濁なく、迷ふといふ事なく狂ふといふ事もなく、いつも昭々靈々として、一點の塵埃なき樣にして行くのは、自ら心を治めて行くの道である。されば心を治めるの第一義は自ら自心を知るといふ事になる。昔し希臘のソクラテースは人に向つて、いつも汝自身を知れといつて居る。羅馬の國王の内でも賢主といはれたアウレリアスは常に侍者に、汝も亦人たる事を知れと戒しめ、自からも戒めたといふ事である。自ら自分の價値を知らぬものであるから迷ひもし狂ひもするが、一切衆生悉有佛性で、此世に生きとし生ける者は、悉く佛と同じ性質を以て居る。我も亦其一人であ

汝自身を知れ

自護

自制

ると思へば、決して此身を粗末にする事はできぬ。今我は此日本國民の一員として、世界一等國の國民たり。且つ叡聖文武なる天皇陛下の下に立ち、國運發展の責我が肩上に在りと思はゞ、決して粗末にする事はできぬ筈である。此自覺によつて自護、自制、自奮の三ツの心得が有る。

一　自護といふのは、自から護ることで、我が身を粗末にせず。衛生を重んじ、病氣などによつて他の厄介にならぬといふことも亦一つ。獨立であり又自治である。止を得ない病氣は是非もないが、自から病氣を招くといふ事は自治の精神に背く譯である。

一　自制とは、自分の心を制縛するので意の駒の止め難く、心の猿の狂ひ易く、止めんとして止め難く其赴くまゝに隨へば、失態に失態を重ぬる者

であるから、自分で自分の心を止めて行かねばならぬ。是れを己れに克つの工夫といふ。自治精神涵養の上に於て尤も必要の事であると思ふ。佛も百千の敵に勝つを以て勇者とせず。己れに克つを以て勇者と仰せられてある。扨て其次の

一

自奮といふのは奮發して自己の職務に盡す事で、則ち自制の方は、惡い心を止めるので、自奮の方は善い事に向て進みて行くのである。國民としていへば、國家の益にならない事を止めて行くのが自制で、國家の益になる事の爲めには身命をも擲て進んで行くのが自奮で、國憲を重じ國法に順ろて行くのが自制、義勇公に報じて行くのが自奮、此二つは車の兩輪鳥の雙翼。相待て自治の精神を養ひ國運の發展を圖る事が出來る

のであります。

運といふ字は、はこぶといふ事で自然に來るといふ事でなく、自力を以て運ぶといふのである。

古歌に

人皆の心のたけを盡くしてし
後こそふかめ伊勢の神風

とあつて國民全體が此の自力を以て運ぶといふ精神を以て、勉强努力して一國の發展を圖る中に國運の發展といふものは出來るのである。

如斯にして、國運の發展を圖るのであるが、只彼らに自國の發展のみ圖りて他國を侵害しても差支がないといふ主義は、決して我が帝國の採るべき主義

國家の理想

帝國主義と世界主義

平等即差別差別即平等

ではなく、又我が國民の考ふべき事ではない。凡そ國家の理想とすることに二つ有る。一つは自國さへ發展すればよいといふ主義で、二は自國の運命を犠牲にしても、世界の爲めを圖ればよいといふのである。一つは即ち帝國主義他は世界主義である、併し我日本の採る所は、如斯偏狹なる國家主義でもなく又無差別なる世界主義でもない。地方々々の競爭が一國の發達となるが如くに、國家と國家との競爭が世界の文明となるのである。世界の文明といふものを、大目的として是に貢獻するが爲めに自國の發展を圖る。國家の一員として世界の文明を望み、世界文明の爲めに國家の發達を圖る。是れが則ち我國民の理想で佛教に所謂平等即差別差別即平等といふのは是れである。

これを人間の上にいふに凡そ世の中に立つて行くのには、自分々々の立脚地といふものを、定めねばならぬと共に、又他人に接して融和して行く所がなくてはならぬ。自分々々の立脚地を定むるのに、自治の精神が必要であるが、他と融和するのには共同の精神がなくてはならぬ。一町一村の自治も、此共同の精神があつて成立し、一國の獨立も此精神に基くのである。共同精神とは即ち博愛の精神ともなり、慈悲の精神ともなるので、是あるが爲めに、互に讓りあひ惠みあひ、持ちつ持たれつして、世の中は立つて行くので、人道の本義はここにある。

共同の精神

人道の本義

此世の中で、一番こまつた奴は、自治の精神もなく、共同の精神もないやつである。是等は到底國運の發展を與に圖る事はできぬ者である。其次は自治の精神は有るが、共同の精神のないものである。其れは我見我慢に流れて、偏屈

に陥り、自分の言ふ事ばかりいつて、敢て他の言を容ない者である。第三は自治の精神なくして、共同の精神計りある。一寸見ると都合がよい樣であるが、自ら護る處がないから、輕薄に流れ雷同を事として、共に事を爲すことが出來ぬ者である。

そこで最も必要なのは、自治の精神もあり共同の精神もある人で、恰も時計の機械が自分々々各々其分を守り職を盡して働きつゝ、しかも共同一致して、時計の表面をして誤なからしむる如く、先づ自分の心を治め、扨て人と接して協力一致して行く。是れが人格の修練である。又國運發展の根柢である。我國民が皆此精神を失はず、相與に務めて怠たらなかつたならば、庶幾くは陛下の御德に報い、國運の發展を期する事が出來るであらう。即ち國運發展の精神的

國運發展の精神的要素

要素としては

- 自＝自治の精神
  - 自護
  - 自制
  - 自奮
- 他＝共同の精神
  - 博愛
  - 仁慈

である、更に國として世界に立ち行くにも此二つが要るので、戊申詔書に文明の惠澤を共にせんとすと云はれたのは世界的共同の目的で國運の發展を計るのは自國だけのことで他國に劣らじとする此の奮發心が世界の文明を助くることとなるのである。徒らに偏狹な考へで外國を排斥するのは却て自國の文明を沮

害するのであり、又世界々々といふて自國の存在を忘るゝのは國運發展の本ではない。此二つを調和したる中道の所に國運發展の妙はある。

實業と修養

二　實業と修養

精神の食物……働く本義……共同生活の美……報恩の觀念……現代の文明は富の文明……日本の產業……發達の餘地……公共の精神……宗教の安心

實業といふは物質的のことである。修養といへば云ふまでもなく精神的のことである。精神的の修養と物質的の實業とは外觀には何の關係もないやうであるが、其の實此の二つは決して別なものでない。丁度人間の身體と心とが別なものゝやうで其の實此二つの離すことの出來ないやうに、人間の仕事には其の身體を養ふに必要なる食物を得る方法を怠つてはならぬと共に、此の精神を養ふに必要なる方法を缺いてはならぬ。唯だ身體の食物を得るのみを以て生活の

精神の食物

全體と心得るのは大きな間違で、人の他の禽獸と異る所は身體の食物を得ることに汲々たる外に此の精神の食物によりて安心を求むるの心あるからである。若し此の心がなかつたらば、吾等の生活は無意義になつてしまふ。毎度いふ話だが、吾等は何の爲めに働くかといへば食はんが爲めといふ。何の爲めに食はねばならぬかといへば生きて居りたいからだといふ。そんなら食ひさへすれば何時までも生きて居れるかといへば、さうではない、如何に多くの物を食つても人生五十、七十は古來稀なりで、死ぬに定まつて居る、身體上の食物は如何に食つても、此の死に行くべき身體を止めることは出來ない。食つても死ぬ、食はなくても死ぬ、仰も吾々は何の爲めに食つて居るのであらう。思はずんば止む、思うて此に至れば生活といふことは全く無意義になつてしまふ。併しこれは我が人生を僅に生と死との間ごのみ見るからで、生れたのが初りでもなければ死ぬのが終りでもない。生といひ死といふのは春の夏となり、夏の秋となり冬となるやうなもので、吾等の一生は實に長い長い天地の一部分、其の間に爲て行くことは、其の間に消えて行くものでなく、長く〳〵因果相續して行くものだといふ安心があつて初めて其の生活にも價値が出て來るのである。生きて居りたい爲めに食つても死ぬに極つた人の世だ、吾々は決して生きて居りたい爲めに働くのでない、長い〳〵宇宙の間に何等かの貢献を爲さんが爲めに働くのだ、生きて居りたい爲めに働くのではない。働くべき爲めに生きて居るのだ、働くべき爲めに生くるといふことは、一見難有くない感じがするが、生きて居りたい爲めに働いても死ぬのだから生きて居りたい爲めに働くのではないといふ

何の爲めに食ふか

働く爲めに生きて居る

ことは、少しく人生の眞相を考へれば何人にも合點が出來る。そんなら何の爲めに働くかといふに矢張生て居りたい爲め、食ひたい爲めに働く氣がする、氣はするが働いても死ぬ、食つても死ぬといふことは目前の事實だ。有難くないやうだが働くべき爲めに生くると考へてこそ人生に高尚な意義がある。近い例は之れを軍人に見たまへ、軍人は何の爲めに月給や年俸を貰つて居るのだ、其の月給や年俸は食つて行く爲め、生きて行く爲め、更らに廣くいへば生活するに必要な爲めに貰つて居るのに相違ない。既に生きて行くに必要な月給や年俸を貰つて軍人となつて居るとしたらば、一旦緩急あつて命がけ戰爭をせねばならぬといふことになつたならば彼等軍人は何うすればよい。生きて居りたい爲め月給が欲しいためにやつて居れば、イザ戰爭となつた時、辭職するより外はない。彼等はイザといふ時に命を投げ出して働くべき爲めに其の職を奉じ、其職を奉ずるが爲めに俸給を得て居るので、決して俸給がほしい爲めにやつて居るのでもなく生きて居りたい爲めにやつて居るのでもない、即ち働くべき爲めに生きて居るのだ。人の職業にはいろ〳〵あるが、皆な之れと同じことで、之れを大きくしては天地の化育を助くる爲めに働くのであるが、今少し小さく見ても社會の進歩の爲めに働くのに外ならぬ。天地宇宙の中には種々なものがある。これを生物と無生物とに分ける。無生物といふのは石や土の類で、生物といふのは又二つに分けて、植物と動物とする。此の生物と無生物と何れが發達したものであるかといへば、云ふまでもなく生物で其の生物の中、動物と植物と何れが發達したものであるかといへば、これ亦云ふまでもなく動物である。其の

報恩と慈悲

動物の中に牛や馬や魚や蟲や鳥やいろ〳〵あるが、其の中で最も發達したのが牛や馬や猿のやうな哺乳動物、其の哺乳動物の中で最も進歩し發達したものはといへば人類である。人は萬物の靈長といふのは決して自分定めではない。其の人類の中でも極く野蠻なものには社會といふものがないが、文明に進むに從つて社會の組織が複雜になつて相互に共同生活の美を擧ぐるやうになる。されば社會の共同生活を助け其の進歩を計るといふことは、天地宇宙の目的を體現して行くといふ高尚なことになり、之れを宗教的にいへば神の御用をつとめ、佛の思召に叶ふことになるのであるから、佛教では一切人類の忘れてはならぬ道德として常に報恩と慈悲といふことを說いて居る。吾々が今日此の如き生活を爲し得るものは皆な吾々より先に生れた人々がいろ〳〵なことを發明して呉れた御庇蔭であるから、此の社會を今一層便利にし、今一層立派にして、次ぎに來るべき時代の人々に渡して行くのが、せめてもの御恩報じである。若し吾々が此處ハポカンと生れただけであつたならば、吾々は何を食ひ何を着るべきかも解らぬ。それが解つて居るのも皆な前の人々の御庇蔭だ、即ち今日の文明は皆なこれ前人の力だ。されば此の社會を發達せしめて行くといふことは當然の務めであるし、又今日の實際生活の狀態を見ても、人は孤立して行くことの出來ないもので、衣も食も住も皆な他人の力で、世界の人類は直接間接に相助けて居るのであるから、吾々は知らず〳〵多くの人や物の恩を受けて居るのであるから、一事一物を爲すにも世の爲め人の爲めといふ報恩の心を持てせねばならぬ。佛も恩を知るは大悲の本と仰せられて、われ〳〵がしみ〴〵此の

恩を知るは大悲の本

人生を味ふと實に莫大な恩を受けて居るのを感ぜずには居れぬ。已に恩を受けて居るといふことを感じたれば之れに報ゆる行のなくてはならぬのは當然のことである。社會は共同生活で、人の此の世の中に爲る仕事はいろ〳〵あるが之れを大別すると、

一　統治機能に屬する者
二　教化機能に屬する者
三　經濟機能に屬する者

とになる、此の中第一の統治機能に屬するものといふのは、上は內閣大臣より下は村役場の小使に至るまで、凡そ一國を治めて行く上に必要なる仕事をして社會の共同生活を助け進步發達を計つて行くもので、官吏、公吏、雇員等皆

統治機能

な此中に屬するので、立法、司法、行政それから陸軍海軍などといろ〳〵ある第二の教化機能に屬するものといふのは教育宗教に從事する凡ての人々で、これ亦其の仕事によつて共同生活を助け、進步發達を計つて居るのである。第三は經濟機能に屬するもの、これは商業、工業、農業等、生產分配に關して社會の富みに關係あるもので、こゝにいふ產業といふのは此の中に含まれるのである。社會活動の大本は此の機能に屬するものによつて成るのである。現代の文明は富の文明で金がなければ國防に必要な兵備も全うすることが出來ず、發達に缺くべからざる教育も充分にすることが出來ない。されば此の經濟機能の發達といふことは一國に取つて最も必要なことである。然るに我が日本の今日は果して何うか。維新以後國家の品位は刻一刻に高まつて今は世界の一等國と

教化機能
經濟機能

借金國

肩を並べて居るが、經濟機能は確かであるか、英國のやうな國は海外に貸し付けてある金の利子だけでも一年に十二億萬圓這入るといふが、日本は貸し付ける所ぢやない二十三億五千萬圓といふ借金のある國だ。されば直接に富の生産に關係すべき産業は果して如何といふに、先づ第一、吾々の生活に必要なる米はといふに今日の所では日本で出來るものだけでは、日本人の食ふだけない。先づ平年作は四千二百萬石乃至五百萬石といふが、日本の人口は五千萬人以上だ。昔から男は一年に一石八斗、女が一石六斗食ふといふのであるさうだが、よし女のみの勘定としても八千萬石ほどなければ足らぬ。然るに實際は此の四千二百萬石の中から四百萬石ほどは酒になつて消えるといふのであるから平年作でも米として殘るのは三千八百萬石、これを五千萬人が食ふとなると、一人が一年に七斗六升、一日に二合餘りといふことになる。これでは足りない、陸軍では一人一日の兵食を六合として居るさうである、此の勘定で行くと、一年二石一斗九升、先づ二石二斗だ、二石二斗を五千萬人が食ふとすると、一年に米が一億一千萬石出來ねばならぬことになつて、平年作では半分以上足らなくなる。これは一例だが、其他日々使ふ石油の如きもの、味噌醤油の製造に必要な大豆の如きものも、皆な足らぬ。足らぬから外國から輸入を受ける、米が平均三千萬圓、豆が同じく七八百萬圓、石油が同じく千二百萬圓といふ割で、外國から仕入る、其他足らぬものだらけで、どし〳〵外國から來る、足らぬものを外國から入れるのは宜いが、何か餘るものがあつて外國へ出すかといふと、毎年輸入超過で、昨年の如きは五千八百萬圓の輸入超過、外國から入る方は多い

輸入超過

が、日本から出る方が少い。買ひもの澤山の賣りもの少しでは到底立ち行かぬ。併しこれでもう充分に力を盡したので此上仕方がないのなら仕方がないが、我が日本には發達の餘地が充分あるといふのが專門家の說で、大豆でも砂糖でも石油でも、其他のものも、やり方が惡いから產出が少いので、やり方さへ改良して行けば充分に發達して行く、殊に最も手近い米の問題の如きも、專門家に聽くと、

發達の餘地あり

そこで、日本はどうかといふに、まだ約五百萬町步耕し得る地面がある、丁度今の田畑の開けて居るのが五百萬町步……學術上で利益的に耕し得る地面は十五度傾斜の所迄でありまして其所までは柵を付けないで結構耕せる。そんな所が尙ほ五百萬町步殘て居る、これらは農學專門家の調べから取つたのであるからして私は間違のないものと信じて居る。ところがまだ驚きますのは唯今耕してある地面です、即ち五百萬町步の熟地になりて居るもの……之に十分に改良整理を加へますると、まだ米を千七百萬石、麥を千萬石增收する見込があるのです（田尻博士の日本現在及將來より抄出）

米麥の增收

と、即ち農事奬勵によりて收穫を今日の二倍以上にすることは決して空想でないのである。これは僅に一例であるが、啻に農のみならず、其他の工業に於ても其の人々の盡力によつて發展せしむることが出來るので、又今日の實狀によつて是非其の發展を計つて國富の基礎を堅めて行かねばならぬのであります。其の實際的計畫は、專門家の研究によるべきことで、われ〳〵の口を出す所ではありませんが、唯だ此の產業を發達せしめて我が社會の共同生活を美にし

宗教上の安心

其の進歩發達を計るといふ心掛けは其の當事者に持つて戴きたいものです。否此の公共的精神がなければ、其の爲ること爲すことが皆な一時的となり、胡麻化しとなり、表面ばかりとなつて徹底しない。眞に產業の發達を計るといふには、是非人生の本務を自覺したる宗教上の安心がなければならぬ。宗教の云ふ所は一時的ではなく、人心の祕奥に觸れ永遠の生命を思ひ、全心の至誠を出さしむ、此の信念あつて初めて眞の產業といふものが出來る。一時目前の利の爲めに胡麻化し的の仕事をするものは、食はんが爲めに生き、生きんが爲めに働くといふ無意義の生活に齷齪して居るもので、眞に人生の本務を自覺し、報恩の念を以て社會の共同生活を助け、其の進歩發達を計り、彼の二宮尊德翁の所謂賣りて喜び買ひて喜ぶの心を失はなかつたならば、永遠の利益を失ふことはない。自利と利他とは決して離るべきものでない、其の圓滿具足した所に佛教の味はある。他を利するの心は、やがて自ら利するの本となり、身を養ふの其の日其の日の職業が大乘菩薩の報恩の行ひとなり慈悲の現れとなる。此に於て敢て自ら欺かず、他を欺かず此の自ら欺かず他を欺かざる心が信用となつて實生活に力を有するに至るのである、心と身とは二つでなく實業と修養とは離れたものではない。

三　心の收穫

農業と修養……一茶の勸農詞……農業の樂……修養の樂……柳生十兵衞……正念坊の壁書……八福田……心の豐年……今日一日の事……心田の耕耘

瑞穗國

我が日本は古より豐秋津洲千五百秋瑞穗の國といつて、農を以て國の本として居るので、國家の大祭にも新嘗祭とか神嘗祭とか申す農家に關係したものがあつて、農業は非常に尊ばれて居るのであります。抑も農とは何をするのでありませう。田を耕すことで、田を耕すと申すは荒れたる土地を耕し耕して立派な收穫を其中から得ることであります。グランド、アレンといふ人が農業の定義を下して「農とは耕作者の欲する草木に充分勢力を與へんが爲め悉く他物を去るにあり」といつて、米なら米、麥なら麥を得ようとしまするに、それの害となる他のものを除き去つて行くことであります。私は此語を以て我が心の田を耕す修養の御話をしようと思ふのであります。修養といふのは英語でカルチュアといつて耕すといふ意味であるさうであります。其耕すといふのは何を耕すのでせう、云ふまでもなく、心を耕すのであります。われ〳〵の心の中には煩惱の雜草や、妄想の虫が付いて本來立派な心の田が荒らされるのであります。之を刈り除いて耕作することがなかつたなれば、丁度萬葉集に大伴家持が

農業の定義

カルチュア

つくりたる、そのなりはひを、雨ふらず、日のかさなれば、植ゑし田もよきにし畠も、朝ごとに、しぼみ枯れ行く

と謳ひました如くに、折角骨折つて植ゑつけた教育の苗も、蒔きました道徳の種もしぼみ枯れ行くものでありますから之を耕し之を耘て立派な收穫を得るやうにするのが精神修養の手段で、修養といふのは詳しくは徳を修め氣を養ふことで、徳を修めて我が心田を肥やし、氣を養うて我が心田を豐にせねばならぬのであります。有形の田地に豐年の嬉しいやうに無形の心田も亦是非凶作のないやうにせねばなりませぬ。

うるさい人世

人間の世の中はうるさいもので、人と人の交際する中には嫌なことも聞かねばならず、面白からぬことも言はねばならず、腹の立つこともあれば氣の塞ぐこともある。唯だ自然を友とし、悠然として、天地と同化する時には嫌なことも聞かず、面白からぬこともいふに及ばず、腹の立つこともなければ氣の塞ぐこともない。春となれば百花瀾漫として咲き、秋となれば四山紅葉を呈す。長閑かに囀づる鳥の音も、心なくして笑ふ道のべの草花も、皆な我を樂ませ喜ばすものであります。此自然を友とし、しかも人生至重の業を營む、農業といふものは實に愉快なことであります。

農業の快

俳諧寺一茶は有名な俳人でありますが、曾て勸農の詞を作りて農業の樂を說きました。之を讀むもの誰か此樂みを思はぬものがありませう、文に

勸農の詞

風流を樂しむ花園ならで、後の畑前の田の作物に志し、自ら鍬を採つて耕し、先祖の賜と命の親に懇をつくし、芳野の櫻、更科の月よりも、己が業こそ樂しけれ。朝夕を留めて打むかふ菜種の花は、井戸の山富貴より好しく、麥の穗の色は、牡丹芍藥より腹こたへあるかと覺ゆ。朝顏より夕顏ぞよけれ、萩菊より芋午旁に味あり。すべて花紅葉より栗柿は實の植物なり。稻の穗並の賑はしく、藁の前より腹滿る心地して、粟穗に

馴る鶉、野邊の蟲の音面白く、遠き名所舊跡より近き田圃の見廻りが飽きず。松島鹽釜の美景より飯釜の下肝要なり、上作の名劍より鎌鍬は調法なり、書畫の掛物より、掛けて見る作物の肥を油斷せず。投入立花の工より、茄子大角豆の正風なるが見處多く、茶湯蹴鞠の遊より、澁茶を呑んで昔語こそおかしけれ。玉の臺より茅藁の家居が心易く、高きに居られば、落るあぶなげなく、迷れば悟らず。念佛の替りに藥を怠らず、實義を盡して神詣に比し、仁者に習ふて山には木を植ゑ、智者の心を汲んで田の水加減を專にし、珍肴鮮肉の料理より、錢入らずの雜飯が後腹病める氣遣なし。すべて世の中は、飛鳥川の流れ、昨日の淵は今日の瀨となる如し。唐の咸陽宮、萬里の長城も終にはほろび、平相國の驕りも一世のみ。鎌倉の將軍も三代を過ぎず。北條足利の武威盡き、織田豐臣の榮も遂に一代なり、時すぎ世かはれば、誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にある內、伽羅闌麝もかぐ中のみ。樂は苦の基、財寶は後世の障り、遊興は暫時の夢、他の富めるも羨やまず、身の貧きも歎かず。唯愼しむべきは貪慾、恐るべきは奢りなり。抑そも田地は、萬物の根原にして、國家の至寶なれば、父母の如く敬ひ、主君の如く尊み、妻子の如く育み、寸地をも捨てず、何處にても天下泰平五穀成就を願ふより外さらになし。

心を耕す修養の二種

自然を友として田地を耕す農業は此の如くに樂しきものであります。心を耕す修養はどうでありませう。

心を耕す修養には自ら二に分れます。一は自分自身で靜かに心の雜草を除いて行くことで、之を靜中の修養と申し、今一つは世の爲め人の爲めに仕事をして行く中に德を修めるので、之を動中の修養と申します。靜中の修養は心を靜めて雜念を去るので、佛敎では之を禪定と申します、禪は天竺の語で靜かに慮るといふ意、定は心を一所に定めると申すことで、心がウハついて居ては善い分別の出るものでございません。チット靜めると妄念や妄想が靜まつて淸い心が現はれること例へば桶の中の水を濁つたからとて、かき廻はせばます〳〵濁

禪定

心田耕作の第一要義

澤庵和尚と柳生十兵衛

るがヂット靜めて置けば濁りは下へ沈んで清くなるやうなものであります。此靜まつた心で物を分別してこそ誤りがない判斷も出るのですが、ウハついた動いた心では、間違だらけで後に悔いても及ばぬことが多いのです。されば、或古德は腹の立つた時には南無阿彌陀佛〳〵と三遍唱へてから怒れとも云はれて居る、靜かに南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と唱へる中には、自分と心が靜まつて妄念が起らなくなるものであります。此心を靜めるといふことは心田耕作の第一要義で、どんなに荒れた心でも、靜めさへすれば善くなるものである。柳生但馬守の御子息に柳生十兵衛といふ人があつた。これは劍道の極意を得て居られた人であるがあまりに高慢からツイ亂心せられた、但馬守が非常に心配をしてかねて御教化を受けて居る澤庵和尚に此事を話されると、よし〳〵己れが治してやるといふので、十兵衛の所へ御出になり試合をしたいと申し込むと、十兵衛は高慢氣違ひであるから「ナニ此方に試合を申し込むこは大膽至極な奴だ、よし〳〵十分に懲らしてやらう」と、道場に出て立ち向ふと、和尚は「待て十兵衛、其方劍術の極意を得て居るといふなら、こゝに其極意を咏んだ歌がある これが解れば試合をするが、これが解らぬやうでは到底話にならぬから試合に及ばぬ」といはれたから、十兵衛は「ナニ極意の歌・何んでも見せよ、己れに解らぬことはない」「さうか」、というて示された其の歌は、「たゞずむな立つな坐るな居すわるな勝つな負けるな知るも知らぬも」といふのだ、十兵衛何んだか少しも解らぬ、解らぬが、解らぬといふことは癪に觸るから「待て」というて一室に入つてヂット其歌を考へる、考へるにつけて心が靜まつて、フト氣がつ

くこ、殆んど夢の覺めたやうに、狂つて居つた心も治まつたといふ話がある。

心田の耕作には此靜慮が最も必要であります。靜かに慮つて仰ぐ天に恥ぢず伏して地に恥ぢざる行ひをして行く時には心に何の疚しき所もなく愉快に世を渡ることが出來るのであります。彼の世に正念坊の壁書として傳つて居る、

正念坊の壁書

死ぬるまで生きて居やうと思へば、年の寄るも糸瓜こも思はず、籬のこほれ牽牛花、ゆがもうが、もじらうが、あんなものと思ひ、時雨ふる夜の小夜嵐吹かうこ吹くまいこ、我身ひとりの苦にもならず、膝を容るゝ二枚敷、一つには事足り、雜煮食はぬ身には聞かせまいこはいはぬ鶯の聲も快く聞き夜着持たぬ家にはさすまいともいはぬ依估顛屐のない窓もる月を眺め、寢る筈の目なれば眠たければ晝もかきこもり、あるく筈の足なれば手の奴、足の

乘物、心の行く所へ迷ひあるけど、盜みせぬ身なれば人も咎めず云々、

動中の修養

といへるは靜中の修養其功を積みたるものと云ふことが出來ませう。併しこれだけでは眞正の修養ではない。自分一人山の中へ入つて心の疚しからざるを思ふのみで、世の爲め人の爲めに働くことがなければこれは活きた世の中に役に立つものではありません。今一つ動中の修養といふものをせなければならぬ、大乘佛教は靜中の修養だけをいふのでなく、一歩進んで此動中の修養を說き、鋤鍬をとる手足のまゝに算盤をこる手足のまゝに、自己の修養こなり世の爲め人の爲に働くことゝならねばならぬ。即ち俯仰天地に恥ぢざる心を以て活社會に活運動を試みるので、或る人が智覺禪師に佛教はどんなものかと問うた時に、禪師は手に鍬を取つて「佛法此中に在り」こいはれたといふことであるし

登譽上人は徳川家康に向つて、心だに聖道に向へば刀槍を事とするとも、これ菩薩の行、といはれたと申すことでありますし、智眞和尚が大黒屋傳兵衛といふ商人が帳面をつけて居るのを見て「傳兵衛、何をして居る」といはれると、傳兵衛は、大般若經を轉讀いたして居りますと答へた。ソコデ和尚が其經を轉讀することによつて何程の功徳があると問はれると、傳兵衛すかさず「此經の力によつて家内餓ゑず凍えず生活し且つ貧民を賑すことも出來ます」といつて帳面を出したといふことであります。これらは皆な活佛教の活修養で、言ひ知れぬ樂が其中にあるのであります。この事を御話するには佛教に福田といふ語があります。

活佛教

八福田

八福田と申すのは、一には曠遠の道路に井戸を穿つて往來の人々の渴を醫するのは福を植ゑるの田だと申すので、二には橋なき所に橋を架して通行の便を計り、三には嶮岨の地を平坦にして往來の利便を計るので、此三つは社會の公益であるべき仕事を代表さしたので、要をいへば、

社會の公益となるべき仕事は福田である

と申すことです。其次ぎ即ち四は孝養父母とありて、我が身の本たる父母には力を竭くして孝養して其意に背かぬやうにするのが、自分の福を植ゑるの田となると申すのであります。申すまでもなく、之れは人倫道徳の大本で、人として此心を失ふときは鳥や獸にも劣るものであります。菩薩戒經義疏には、

父は姿形の始め生成の徳あり、孩提より長なるに至るまで教誡育養して其恩極りなし、人の子たるもの固より力を竭して奉養すべし。心至孝の純なる

ときは自然に福を獲べし。

といひ、

母は初め懷胎分娩より哺乳鞠育に至るまで護持長養愍念苦勞す、其恩極りなし。人の子たるもの力を竭して奉養すべし。心至孝の純なるときは自然に福を獲べし。

とあつて、父母の恩は山よりも高く、海よりも深いから、之れに報い、其心を安んずるといふのが福田の一と云はれたのは道理至極なことであります。少しも父母に孝養せずして自分だけの福を得ようとしたからとてそれは得らるべきものではございません。其次ぎは即ち三寶を恭敬すで、三寶と申すは佛、法、僧で、此三つは宇宙の眞理と、それを說きました御方と、それを傳へる人々を指したので、云はゞ宇宙の眞理に隨順し、それを示して宗教を信ぜよといふことであります。第六は病人を給事せよといふので、病人はもろ〳〵の苦が身に集つて自由がきかず、醫藥のことも飲食のことも他人の力を賴むの外はないそこで親切に之れを看護して早く健康に復するやうにするのは、これ又福田となるのであります。七は貧窮を救濟せよで、食ふに食なく着るに衣なく苦み困つてをる人々を救うてやるといふこと、即ち今日の慈善事業は悉く福田となるべきものであります。第八は一切の人々其生きたると死したるとを問はず、三寶の力を以て精神的に之を救ふのです。この八福田もいろ〳〵詳しく御話すれば、むづかしい理窟もありますが、今要を取つて申せば、

一　社會の公益となるべき仕事をなすべき事

二　父母に孝養を盡くすべき事

三　一切の慈善的行爲をなすべき事

こ申せばよろしいでせう。これが皆な心の田を豐にするので、一言一行、世の中の爲め人の爲めになるやうにと心得、病氣の人や貧しき人を助けるのみならず、一切慈善となるべきことは之れを行ふので、迷へるものを救ひ、苦めるものを助けるといふのが八福田の眼目であります。されば御經に、

此八種は皆な福を種るに堪たり、故に田と名く、若し人能く力を盡くして此八種に從事するものは亦た農の田を力むれば即ち秋成の利を獲るが如し。と仰せられてある。

即ちこれが心の豐年の本となるといふのであります。

心の豐年

何人か豐年滿作を望まぬものがありませう、又何人か心の豐年を思はぬものがありませう、何うしたらば心の豐年が得られませう。行誠上人の御歌に、

あれまさる心の駒は幾たびも
鞭うちてこそすゝむぞと知れ

で鞭ち奬ますことがなければ、到底善き心の收穫は得らるゝものではありません。心に鞭つには日々に我が身に顧みて我が正しとする所のことは果して我れ之れを行ひつゝあるかを考へて見るが一番です。心で思うても口へ出すことは出來ず、口へ出して豪さうに人に語つても身に行ふことの出來ないのが、われわれ御互のことで、昔或る無學な男が、學者に向つてどうか、生涯の守りとなることをば教へてくれといふと、學者先生、それは外のことはいらぬ、唯だ堪

堪忍の四字

忍の二字を守ればそれでよいといふと、無學者はかんにんとは四字でございますと云ふ、學者「イヤ〳〵堪忍とはたへしのぶと書いて二字だ」といふと「たへしのぶならば五字ではござらぬか」「イヤ五字ではない二字だ」「二字と仰つても、た、へ、し、の、ぶ、と五つではござらぬか」といふに、學者腹を立て、

文字より實行

「サテ〳〵無學者といふものは解らぬものかな、蟲けらにも等しきものぞ」といふと、無學者「私は無學で何にも存じませんが、かんにんの四字を守つて居りますから、貴殿に惡口せられても少しも腹を立てませぬ」というたといふ話があります。文字は知らずとも、實行の出來た方が心の收穫は多い。理窟ばかりいうても實際に行へないものは目あつて足なき跛同樣だと申すことで、佛教では智目行足といひ、王陽明は知行合一と說いて自分の正しと知つたことは之

智目行足

山鹿素行の誡

を行はねば、眞實に知つたとはいはれぬとの義であります、日々に顧みて正しと思ふことをやつて居るかどうかといふと、われ〳〵の多くはそれが行はれない、行はれないから心の田は荒れに蕪れて終に福田を植ゑることが出來なくなるのです。ソコデ山鹿甚五左衞門は、

大丈夫唯だ今日一日の用を以て極と爲すべきなり。一日を積で一月に至り、一月を積で一年に至り、一年を積で十年とす。十年相累り百年たり。一日猶遠し、一時にあり。一時猶長し、一刻にあり。一刻猶あまれり一分にあり。

こゝを以ていふ時は千萬歲のつもりも一分より出で一日に究まれり。一分の間をゆるがせにすれば、終に一日に到り、終りには一生の懈怠となるなり。

と一刻一時も忽せにせぬやうに心を守つて、油斷なく修養して假にも雜草の

生えぬやうにして行けば、心の收穫は豐かになるものであります。一體油斷の出來るといふのは此一日を粗末にするからで、稻葉美濃守が、或る時澤庵和尙に向ひ「どうも長い日に勤仕して居ると退屈でこまるが、之れを治す法はなからうか」と云はれた時、和尙は、

無此日再日　寸陰一尺璧
果敢なしや思へば日々の別れ哉
昨日の今日に又もあはねば

と書いて遣はされた。美濃守は日々之れを思うて、少しも退屈することがなかつたと申すことです。無常迅速、生死事大、今年も早や過ぎました、來年からはなぞと思はずに、只今此時から心を込めて日々怠らず、雜草を刈り取ること

に御盡力なされば心の收穫はいと多からうと思ふのであります。心が豐になれば身も健になる、身が健になれば身代も亦豐になる。此心を失はなかつたならば、年に豐凶の差はあつても、心はいつも豐年であります。古人も、

一日道を怠れば一年の過となり一年其道を過れば、百年の計を失す。

というて居るほどですから、日々の修養が必要であります。

さて此の心の收穫を得るには、何うすればよいかといふに、それは日々に怠らず、心の雜草を刈り除いて善き種を蒔くことを忘れぬやうにするより外にない。先づ此心の田に繁茂する雜草はドンナものであるかといふに、これは其數非常に多く、佛教では八萬四千というてありますが、其中の最も根の深く性質の惡いのは貪瞋痴慢疑の五であります。貪とはムサボルで惜しい欲しいといふ

心、これあるが爲めに八福田も耕すことは出來ず、人と爭ひごとも出來るのであるから知足安分、慾を少なくしてさへ居れば心の田は荒るゝこともなく、草も生えねば虫もつかぬ、昔噺に法螺貝の身を抜くには貝を倒まに吊して、下に酒桶を置いておくと、法螺貝は酒が好きであるから首を伸してだん〳〵下へさがり、終には其身を酒桶の中へ落して、都合よく其身を抜かれてしまふのであると申すことがありますから、われ〳〵が貪慾の爲めに身を亡ぼすのは此法螺貝と同じことでありますから、第一に此貪を去らねばなりません。瞋といふのは腹立ちで、「燒きつぎや夫婦喧嘩の門に立ち」で、腹を立てゝ利益になるものはない、或る人が布袋和尚の贊とて「おんにこ〳〵腹立てまい薩婆訶」と書いてこれさへ守れば家内安全だと云はれたのも理で、少しでも腹を立てる時

布袋の贊

は心の田は皆な燒き盡されてしまふ、瞋恚の火はすべての福田を燒き盡くします。痴といふのは理の解らぬことで目の前のことだけを考へて、後先を考へず鼻先き思案で、まことの心を見出さず、善惡の理に迷ふので、これが本となつて爲ること爲すことが心田蹂躙となるのですから、よくよく心を靜め、因果の道理をも考へ、

よしあしの影はまがはじ難波江や
そこすみわたる水のかゞみに

と三輪執齊のいうた通りに心を澄みわたらせて行かねばなりません。慢といふのは我慢高慢とも續いて自分をえらしと思うて他人を慢る心です。凡そ人に此心が出ては、もう其人の發達は見込のないことゝなるので、何時までも、自分

に省みて我が足らざるを補ひ行く心があつてこそ進歩もあれば發達もあるのであります。

人のとがを咎める度ぞ我とがを
とがめて見ればいとまなき身を

で、自分に省みて慢心を刈る。さて其次ぎの疑はうたがひで、信の裏になります。世の中のことは一から十まで疑つて居つては何にも出來るものではありません。飯を食へといはれても、何故飯を食はねばならぬのであらう、飯を食うてどういふ理由で腹がはるのである、それが解からねば飯は食はぬといふ。先づ植物學を研究し、化學を研究し、それから人體の生理を研究して、いよ〳〵解つたから食ふというて居ては、それまでに死んでしまふ。勿論研究即ち疑つ

解るまでには死んでしまふ

てかゝるといふことも必要ですが、それまでは先づ父母も食へと仰やる、先輩もさうして居られると、これを信じて行くといふことがなければならぬ。農業でも老人のいふこと、學者の説明、これを信じて改良も出來れば上手にもなる心の田を耕すも其通りで信こいふことがなければならぬ。以上、貪、瞋、痴、慢、疑の五は心田を荒らす最も大きな雜草でありますから、佛の教を信じて之れを刈り取り（戒）、心を靜めて善い種を植ゑ（定）、ます〳〵智慧を研いて向上進歩を計り一歩一歩、一日一日、心田を荒す雜草を刈り盡くすの習慣をつけて善い種を蒔くことを怠らなかつたれば、何時も心の豐年を謌ふことが出來ませう、習慣は第二の天性です、心を荒されぬやうにする習慣をつければ豐年は疑ひありません。

むかしたれ人の心は白糸の
　そむればそまる色になしけん。

と日々の反省が肝要であります。

四　修道訓話

迷の本……愛欲……悟の性……當成佛……改過……慚愧……反省……自心を見よ……克己……富樓那物語……怨……勉勵……不惜身命

佛典に現はれたる金言に基きて道を修め道を行ひ指針を俗耳に入り易く講解して以て修養の枝折たらしめんとする。

○迷の本

精神修養の第一着は迷を轉じて悟を開くにあるので、其迷ひの本となるのは我が〳〵といふ我見が根本で、此根本によつて我が氣に入るものを愛し、我が氣に入らぬものを憎み、愛憎好惡の念を生じて終に迷ひに迷うて身を亡ぼすに

轉迷開悟

至るものである。されば佛は、

愛欲の人は猶ほ炬を執りて風に逆ひ行くが如し、必らず手を燒くの患あり

（四十二章經）

自分の愛欲の爲めに自分の身を傷けるのは炬即ちたいまつを持つて風に逆つてゆくやうなものであると仰せられた。

欲の網を以て自ら蔽ひ、愛の蓋を以て自ら覆ひ、自ら我が身を獄に縛するは魚の網に入るが如し（法句經）

丁度われ〳〵お互の身體や心はコンナもので、をしい、ほしいといふ欲の網や愛の蓋で自分と自分の心を蔽ひ、自分の身を獄中に投じて居るやうなもので此愛欲の網を破り蓋を除きさへすれば自由自在の身體となることが出來るので

ある。限りある眼を以て限りもなく遠い所のことを見たいと思ひ、限りのある耳を以て限りのない遠い所のことを聽きたいと思ひ、死なねばならぬ身體を以て何時までも生きて居りたいと思ふのは、繩でくゝられて自由自在を得たいと思うて居るのも同じことです。此繩を輪廻の絆煩惱の繫縛といふのであります、此愛欲を起すの本は我こいふものがあると思ふからで、佛法の道理から申して別に我こいふものがあるのではない、因と緣とによつて出來たので、因といふのは原因、緣こいふのは原因を助けて結果を生ぜしむるもので、此二つの作用で假りに我となつて居るので、もと〳〵我こいふものゝあるのではない。ありもせぬのに、我こいふものがあると思ふのが迷ひの本であります。其事を佛は水の中には本來月影なけれども、淨き水をば緣と爲して月を見るにも、諸法

の縁によりて生ずる、皆之れ假なり、さるを凡愚は妄りに計して以て我と爲す（心地觀經）

と云はれてある、水中の月の影はもとよりあるべきでない、ありもせぬものをあると思ひて迷ひに迷うて居るのは愚の甚しきものではありませぬか、これに就ていと面白き譬喩話があります。

甕中の影

昔、或る所に一人の長者があつて、新に妻を迎へて、仲善く暮らして居りましたが、一日、夫が妻に對して厨の中に酒があるから取つて來いと命じました妻は早速厨に參りまして、甕の蓋を除けて其中にある酒を酌まうといたしまして、フト見ますると、自分の影が其中に映つて居ります。それとは知らずに別に女が居るのであると思ひ、大に怒りまして、夫に向ひ、貴方は先きに妻を持つて之れを甕の中に隠し、又妾を迎へられたのでござりませうと、縷々として怨言を述べました。夫はソンナことがある筈はないとて、自ら厨に往きまして甕の中に己れの姿の映つて居るのを見て、大に怒り、卿は外に男をこしらへて此中に隠くして置くのであるといひ、互に罵り、各々自分の見た所を實として爭ひやみませぬ。時に此長者と仲の善い一人の修業者（梵志）が參りまして夫婦の爭ふ所由を聞き、されば自分が見極めんとて甕をのぞき、これは長者が他の親厚な修行者を此中に隠して置き、ワザト夫婦喧嘩を爲して、自分を試めさうとするのであると思ひ、大に怒つて歸りました。そこへ一人の比丘尼が參りまして長者の供養を受けようといたしましたが、例の爭ひで、それどころではありません。先づ夫婦をなだめて其所由を聞き、また甕を見て、其中に比丘尼の

何ぞ迷へるの甚しき

居るのを見て、己れに戯るゝものとして怒つて歸りました。夫婦の爭ひはなかなか止みませぬ。其處へ佛教の悟を得た人が參りまして、其甕の中を見、夫婦が自分の影によつて爭ふを知り、喟然として嘆じて何ぞ迷へるの甚しきとて、夫婦に向ひ、われ卿等の爲めに甕の中の人を出さんと、大きな石を執りて、其酒甕を割りました。スルト唯だ酒の流れ出たのみで人は居りません。佛は此譬喩を以て、われ〳〵が假りの此身を知らずして實にあると思ひ、貪欲を起し、瞋恚を爲し、邪見を抱き、日夜惡業を造りて居ることを戒められました。（雜譬喩意譯）

國の鏡のない

これが世間に傳はつて「鏡のない國」の話なぞといふ御伽噺となつたので、滑稽な話であるが、なか〳〵味のある話であります。

よしあしのうつる心の水鏡
よく〳〵見れば我が姿なり。

である。

諸苦の因る所、貪欲を本と爲す。もし、貪欲を滅せば依止する所なし。（法華經）

たとへば犬に枷してこれを柱に繫げば終日柱を繞りて離るゝ能はざるが如く一切の凡夫も亦無明の枷をもて生死の柱に繫がる。（涅槃經）

されど若し一旦翻然として迷の本を絶たんか、本來の性はこゝに其光を放つのである。次ぎに其事を示しませう。

○悟の性

佛の教は心の闇を破る光

一切衆生に皆な佛性あり。その性盡くるなきも昔よりこのかた隱蔽せらる。諸佛如來大慧燈を燃して諸の衆生をして了々分明に之を見せしむ。（大雲經）

と、實に我々は本來鏡の如く一點曇りのない佛と同じ性質の心を持つて居るのであるが、我見妄想の爲めに蔽はれて其光りを見ることが出來なかつたのである。佛の教は此闇を破るの光りで、此の光にあうてわれ〳〵の心の闇を去ることが出來るのであります。佛の性とてわれ〳〵と違ふ所はないので、われ〳〵の心の奥にも此性のあることは、

我佛眼を以て一切衆生を見るに貪恚痴の諸〳〵の煩惱の中に如來智、如來眼、如來身あり、結跏趺坐して儼然として動かず。（如來藏經）

と仰せられてある。即ちわれ〳〵の貪欲瞋恚愚痴の中に如來即ち佛の智慧もあれば眼もあり身もあるとの仰せである。されば

彼も人なり我も人なり

大衆諦かに信ぜよ、汝は是れ當成の佛、我は是れ已成の佛。（梵網經）

と仰せられてある。おまへ達は當に成るべき佛で、我は已に成つた佛だこの仰せで、釋迦何人ぞ、達磨何人ぞ。彼も人なり、我れも人。堯も舜も我も同じく人である。彼れはたゞ已成の聖人、我れは當成の聖人だけの差ぢや。シルレル、ゲーテは已成の詩人、我れは當成の詩人ぢや。ナポレオン豐太閤は已成の英雄、我れは當成の英雄であるだけのことぢや。面山和尚は之れを解り易く喩へてわれ〳〵お互に澁柿のやうなものぢやが、其澁柿も日に晒らせば澁そのまに甘い柿となる、われ〳〵も佛の惠日に照らして聖人同樣の甘い柿にならねばならぬ、それには先づ澁皮を剝く必要がある、こゝに於て改過の必要おこる。

○改過

我れも佛も（聖人も）同じことだと思うて、さて我が身を顧ると隨分慚かしいことのみ多い。此慚かしいといふ念が佛に近づく第一歩で、佛は慚愧の水を以て塵勞を洗へば身心俱に清淨の器となる。（心地觀經）

と仰せられ、此慚かしいと思ふ心で、これまで心について居つた塵が洗ひ淨めらるゝのである。たゞに洗ひ淨めらるゝばかりではない。

慚耻の服はもろ〳〵の莊嚴に於て最大一とす。

と云はれて慚かしいといふ衣服はもろ〳〵の着物の中で一番美しいものである

と云はれてある、此慚かしいと思ふ心は實に美しいもので、此心がやがて悔い改めの心となり、終に本來の性が磨き出す本であります。

慚愧の心なく悔い改めの心なきの人は惡として造らざるはなし。（法句經）

人、衆くの過あらんに、自ら悔いて頓にその心を息めずんば罪の來りて身に趣くこと水の海に歸して漸く深廣となるが如し。（四十二章經）

これに就ては百喩經にいと面白き譬喩談がある。

昔、或る人が友達の所に參りまして、そこに米の搗きかけてあるのを見て窃かに偷んでこれを口に含みました。口に含んで未だ嚙み下さぬ中に其友達が出て參りまして話しかけましたが、此方は口の中に米があるものであるから話すことが出來ない、さればとて之れを吐き出すのも面目ないものでありますから默つて困つて居りました。友は其口のふくれて居るのを見てこれは口の腫れたのであると思ひ驚いて醫者を喚んで參りました。醫者は之れを見まして、之れ

は截開せねばならぬこて刀を以てこれを截りました。截りまするとと中から米が出たものであるから、終に其偷み食ひをしたことが露顯して大に慚をかいたこいふことがあります。世の中の人が一つの惡を作して之れを懺悔せずに、隱さうとするものであるから終に其身を傷くるに至るのは此話のやうなものであると佛は御示しになりました。

悔い改めて心を清淨にすれば、我れも佛も異りない立派な心となるのです此心を以て世を渡るのが佛教信徒の心得であります。それであるから精神修養は此の一旦輝き出した佛と同じ美しき心を失はぬやうにしてゆくのにあるのでこれには反省が必要であります。

○反省

自ら身を觀て、他人の身を觀よ、自ら意を觀て、他人の意を觀よ、自ら法を觀て、他人の法を觀よ。（忠心經）

自分の身の善惡を見てから、他人の善惡を見よ、自分の意の善惡を見てから他人の意の善惡を見よ、自ら我が法の善惡を見て、後に他人の法の善惡を見よといふの意で、內、自ら顧みて而して後に人を見よといふのである。自分の頭の上の蠅を追はずに他人の批評をするのは大きな間違である、常に自ら省みて我が心に本來の悟の性を汚して居りはしないか、どうかといふことを省みるがよい。

菩薩は餘事を覺らず、但だ自心を覺る。何を以ての故に。自心を覺るものは即ち一切衆生の心を覺るが故なり、若し自心清淨なれば一切衆生心清淨

なるが故なり。（大莊嚴法門經）

とある。菩薩といふのは道を求むるの人といふことで、但だ自心を覺るのが抑も道を求むるの第一であるから自分の心に不淨があれば他人に向うても不淨を起す、我が心と一切他人の心とは同體のものであるから自分の心を清くするが肝要である。

凡夫は自心を觀ざるが故に生死海中に漂ひ、諸佛菩薩は、能く心を觀るが故に生死海を渡りて彼の岸に至る。（心地觀經）

とあるのも自心を省みることの必要を示されたので、常に自心を省みて汚れのないやうにすれば、佛は、

心、すなはち濁亂を離るれば、われ心を說て佛と爲す。（入楞伽經）

衆生もさより佛性あり

堪忍土

とも仰せられてある。本來此の立派な心があるのに、徒らに他に求めて自ら省みることを知らぬを喩へて、

衆生もさより佛性あり、他より得べきにあらず、もし他に之れを得んこせば人ありて自らの衣の中に如意珠を持ちて、しかも覺らざるが如く、又倉に寶を收めてこれを知らず、馳せ走りて食を求むるが如し。（首楞嚴經）

と云はれてある。さてかく清き心を失はずに世に處してゆくには忍耐といふことを忘れてはなりませぬ。

○克己

常に己れに克ちて耐へ忍ぶといふことがなければ、何事も出來るものではない。此世界を堪忍土ともいうて、憂きことつらいことの多いのであります。其

中に立つて清き心を失はぬやうにするには此堪忍に過ぎたるはありませぬ。されば佛は、

忍の德たる、苦行持戒の及ぶ能はざる所、能く忍を行ずるものは、即ち名けて有力の大人と爲すべし。（遺教經）

十千の敵に對し、一夫にして勝つとも、未だ自ら勝ち忍ぶの上なるに如かず（法句經）

とある、此の忍辱に就てはいろ〳〵の逸話があるが、こゝにわれ〳〵の學ぶべきは富樓那尊者の物語である。

富樓那尊者

或る時、佛の御弟子の中に說法第一と云はれた、富樓那尊者が、世尊に對し之れより西の方、輸盧那といふ國へ布教に參らうといたしますと申上げると、佛は其國の人は亂暴で、殊に罵詈を好むのであるから、汝が布教に行けばいろいろな辱しめの語を受けるであらう、其時に汝はどうするかと問はれました。尊者は世尊よ、彼の國人、如何に我れを毀るとも、私は心にかう念ひませう。かの國人賢善にして智慧あり、われを毀れども、尙ほ石を以て打擲するには至らじと、世尊更らにいひたまふには、かの國人の毀辱は、よし汝之れを忍ぶとも、もし石を以て打擲せば如何にすると、尊者答へて、われは念じて言はん、かの國人、賢善にして智慧あり。石をわれに加ふるも、なほ刀杖を用ひずと。佛さらばもし刀杖を加へなば如何。尊者いふ、かの國人賢善にして智慧あり、刀杖を加ふるとも、尙ほ我れを殺すに至らじと念ぜん。佛は、殺さば如何するぞと問ひたまふ。尊者は、われは此念を作さん。死の緣一ならず、或は繩

を以て繫るあり、或は坑に投ずるあり、かの國人賢善にして智慧あり、わが此の朽敗の身に於て少しの方便を以て解脫をなさしめんと。佛は之れを聞きたまひて、「善い哉、富樓那よ、汝能く忍辱を學べり、以て輸盧那を化すべし、行け速に、行きて未度のものを度し、未安のものを安んぜよ」と仰せられました。（雜阿含經）

ナント立派な心掛けではありませぬか。如何なる屈辱に會うても、かの國人賢善にして智慧ありと念じて少しも瞋らざる此心掛けが最も必要であります。佛の、

怨は怨を以て終に息む事を得べからず、されど忍のみ能く怨を息む（法句經）

と仰せられたのも、此趣きであります。

常不輕菩薩

昔、一人の菩薩があつて、誰れでも彼れでも見る所の人には僧であれ俗であれ、悉く禮拜していふ、われ深く汝等を敬ひ、敢て輕慢せず。如何となれば汝等皆な菩薩の道を行ずるを以て、必らず佛と作るを得べければなり」と、此中に邪見の者があつて、何の智あつてか、我等に對して佛に作ることが出來るなぞといふか、我等は汝の如き無智の比丘のいふことを信ぜずと罵つたが、其菩薩は尙ほ瞋恚を出さずして「汝當に佛に作るべし」というて居つた人々の中には或は杖木を以て或は瓦石を以て打擲するものがあつたが、菩薩は少しも怒らず、避け走りて「われ敢て汝等を輕んぜず、汝等當に佛と作るべし」というて居つた、其爲めに人は稱して常不輕菩薩というたとある。（法華經）

大丈夫の世に處する覺悟

如何なる屈辱に遇ふとも其人を輕んぜざるの心あつて初めて佛の行ひをすることが出來、我が心は少しの汚れがなくなるのである。

○勉　勵

忍耐して進みゆく所は無上道である。これを解し易くいへば、人の人たる道を盡すが爲めには如何なる困難辛苦にも耐へ忍んでゆく心がなければならぬ。この耐へ忍ぶのは忍耐で、進み行くのは勉勵である。

我、身命を惜まず、たゞ無上法を惜む。（法華經）

これが大丈夫の世に處するの心でなければならぬ。楠正成の歌に

身のために君を思へば二た心
君の爲めには身をも思はじ。

勤めて精進なるべし

で、道の爲めには身命を犧牲に供して進みゆくのが、まことの勇氣、即ち不惜身命の勉勵である。それを自分の身を先きとして道の爲めを後にすれば終に臆病未練となる。そこで「身の爲めに君を思へば二た心」とあるのである。「法の爲めにし身の爲めにせず」といふのもこれで、われ〳〵の日常の生活、商業をするも工業をするも自分の爲めと思はずして世の中のためといふことを先きとしてやるのが佛教信徒の心掛である。此心掛けを以て進めば少しづつの行ひでも終に積つて大きくなるものである。佛は

汝等勤めて精進なるべし、精進ならば即ち事こして難きものなし、喩へば小水も常に流れて止まずんば即ち能く石を穿つが如し。（遺敎經）

一滴二滴の水でも、終に石を穿つことのあるやうに勤めて怠らずんば如何な

る事でも成し遂げられぬことはない。これに就て面白い話がある。

昔し一羽の鸚鵡があつて、偶ま大きな竹林の中に參りますること、其中に禽獸が皆な仲善くして、互に樂しく暮らして、少しも爭ひをいたしませぬ。それを見て大に喜びて自分も其中に入りて數日の間樂しく暮らして居りました。さて鸚鵡の歸りました後に、その竹林に大風が起つて竹と竹と磨れあひまして火を出し大變な事となりました。中に居る禽獸は皆な恐れ悸きて飛び廻り悲しみ鳴いて居りました。鸚鵡は之れを見て、どうかして火を消したいと思ひましたがどうすることも出來ませぬ。ソコデ自分の羽を水にひたして來ては眞中から一滴づつ其炎々として燃えて居る火の中へ注ぎて之れを消さうといたしました。天の神さまが之れを見て、鸚鵡に向ひ、ナント愚なことではないか、千里の火は一羽の水では消すことの出來るものではない、と云ひますと、鸚鵡は、われ曾て此林中にあり、林中の禽獸皆な兄弟の如し、さるに今彼等家なきに至りて悲んで居るのを見て居るわけにゆかぬから之れを救はうと思うて居るのである。我が一羽の水は少いけれども我が心は廣い、もし勤めて怠らなかつたならば、必らず此火を消すことが出來るであらう、若し自分の一生に出來なかつたならば、來世の身を以て之れを滅せんと云ひましたので、天神は大に感じて大雨を下して其火を滅したといふことである。佛は此喩を以て示したまはく、一切衆生は皆な貪欲、瞋恚、愚痴の三火の爲に燒かる、われ之れを見るに忍びず智水を以て之を滅するは、さながら是の如しと。

我等の世に處す、此の覺悟を以てせば、何の時か其目的の達せられないこと

はない。（雜譬喩經）

精進を舟筏と爲す、能く深廣の河を濟せばなり。（五分律）

以上は佛の訓誡を本として我等が修養の道を示したので、先づ迷の本なる我見を破りてこゝに佛と同じき清き心を得、此心を失はざる樣に反省し、外に對しては忍辱を以て此心を汚さゞるやうに注意し、かくて勉勵怠らずんば終に精神修養の極に達することが出來るのである。

增補 佛教々理要論

第一章 序論

曇天が恰好

ヴイクトル、ユゴーは佛國近代の文豪なり。彼れ人生を觀じて曰く、尤も昌榮せる人の生涯にありても實際常に歡より悲の多きを見れば曇天は吾人に恰好せるものなりと。太田錦城は近世の碩儒なり、彼れ塵界を評して善も必ずしも賞せられず、惡も必ずしも罰せられず、天下の事は白日街上を走るやうにはなきことなりと云へり。人生は斯く暗澹たるか、榮枯夢の如く、盛衰幻に似たり、浮世何の賴むところぞ。無常の風は、貴と賤と、老と幼と、貧と富とを

錦繡の袖にも涙痕あり

問はず、朝の紅顔夕の白骨、翠帳紅閨尚ほ悲慘の事あるを免れず。錦繡の袖、亦た時に涙痕斑々たり、「此是應捨罪惡物、假名爲レ身、沒在老病生死大海」嗚呼吾人は終に此の悲況を脱する能はざるか。吾人はこれ曠漠無邊なる空間の中に漂ふ受胎の微形のみ。日月上に照し、山河下に羅なる。眼耳の視聽する所、鼻舌の嗅嘗する所、生死を縷の如きの中に繫ぐ。眞に「不レ知生所レニ從來一死所ニ趣向一」もの晴天か、曇天か。これを想へば吾人は實に如法暗夜の中に漂泊ふ一蠢蟲、また果敢なきものならずや。

幸福は人の望む所、而して天多く與へず。偶〻これを與ふれば直ちに之を奪ふ。困苦は人の憎む所、而して人間到る所、災厄あり。天地何爲者ぞ。吾人を驅り吾人を率ゐて此の黑闇々裏に陷擠す。山河無情喚べども答へず。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在つて樂しみし古人を追へども還らず、空しく壺を叩いて不平を訴ふ。噫嗟、吾人は到底安樂なる能はざるか。

先天的宗教思想

自然教

人、誰れか血なからむ。人、誰れか涙なからむ。血あり涙ある者誰れかまた這般の情想なからむ。吾人は之を呼んで先天的宗教思想と云ひ、此情想により組成せられたる宗教を自然教といふ。世、大悲大慈の先覺者なくんば則ち已む苟くも大慈大悲の先覺者あり、彼れの涙豈に此の悲慘なる人生に濺がざらんや彼れの血、何ぞ此の情想の爲めに沸かざらんや。彼が慈悲、彼が權能、彼が勇氣は早くも此況を達觀し、雷雨一過山更らに靑きが如く、利刃一閃煩惱を斷離し自ら淸淨の境に住し、天空快濶の生死の苦厄其來る所以を明知し、罪惡痛苦隻影を止めず、苦なきの樂、禍なきの幸、以て善美の境あるを顯示し、一

切衆生をして其德に浴せしむ。これを顯示者と云ひ、教主と呼ぶ。この自然の情想とこの顯示者と相合してこゝに眞正の宗教を組成す、緣なき衆生は度し難し、顯示者ありと雖自然の情想なくんば教を垂るゝ能はず、自然の情想ありと雖、顯示者なくんば永く苦界に迷うて樂果を得る能はず。たゞそれ顯示者一道の光明この如法暗夜を照してよく希望の世界たらしむ。吾人はこれによつて解脫の大法を知り、苦界を脫するの希望を得るなり、この顯示者と自然の情想これ即ち宗教の二要素なり。然らば問ふ。宗教とは何ぞや。想ふに人は冷灰の如き理性を有すると共に、燃ゆるが如き情感を有するものなり。此の理性と情感とを調和して、始めて安心立命を得べく、眞正の快樂を享受し得べし。これ煩惱を斷離する宗教の任務なり。此の智は以てかの情想を究むべく、此の情は

宗教は調和を意味す

以て信を顯示者に與ふべし。宗教は調和を意味す、よく悲（情）智を圓滿ならしむ。人生の樂は有限なり、又は相對なり。これが故に失ふの苦あり。また究竟の樂あるなし。有限なるが故に煩惱起り、相對なるが故に迷ふ。宗教は調和を意味す。この有限を離れ、この相對を脫して絕對無限の境に遊び、よく迷悟を不二ならしめ、煩惱即ち菩提たらしむ。

言を換て之を云へば、宗教は有限と無限、相對と絕對とを調和するものなり。更に換言せば宗教は神人の契合、衆生と佛陀との調和を計るものなり。何をか神人の契合、衆生と佛陀との調和といふ。吾人は之を說くに先ち少しく差別と平等とに關する見解を述べざるべからず。法性眞如の月、影を萬機の器外に浮ぶ。器水異なるが故に、形影無量なりと雖も、其體本來同一性にして殊別ある

なし。

天を望めば、日月星辰の整然列を紊さずして空際に懸るあり、地を眺めば、山河大地草木禽獸の歴然として目に觸るゝあり。千差萬別毫も一様の觀なし。されど、飜つて遠觀すれば、日月星辰ありと雖も、均しく天なり、日や、月や、星や、辰や、差別の體相ありと雖、天の均しく天たる平等の理性を妨げず。山河や草木や異なりと雖、均しく地なり、老幼男女貧富貴賤の差別劃然其序を紊さずと雖、人の人たるに於ては平等なり。平等なればとて老幼男女貧富貴賤の別、山河大地草木禽獸の差、日月星辰の異なきにあらず。差別の裏には平等の理性あり。平等の中には差別の體相あり。これ實に天地を貫き、三世に渉るの眞理、唯夫平等の性理のみを認めて差別の現象を忘れ、差別にのみ眼を注ぎて

平等の一理あるを知らざる者、共に宇宙の眞理を談ずるに足らざるなり。既に宇宙の眞理を談ずるに足らず、何を以てかまた人生の調和を計らん。一色一香中道にあらざるはなく、一縷の柳糸、一片の梅花、尙ほよく平等差別の理を示す。宗教は實によく此の性相を調和せざるべからざるなり。たゞそれ平等なり。是を以て佛と衆生との差別なく、迷と悟と一にして二ならず、善なく、惡なく苦なく、樂あることなし。たゞそれ差別あり。是を以て森羅萬象整然たり。善惡苦樂歴然として分たる。平等はこれ法性眞如の一理、差別はこれ現象の實際界、起信論に眞如門、生滅門と云ひ、中論に世俗諦、第一義諦と云ひ、また眞俗二諦といふもの蓋しこれに過ぎざるなり。此の二者人生に及ぼして智情となり、智あり道理を推究すべく、情あり信念を生ずべし。智は進で平等の研究に

入り、絶對の覈察をなし、情は退て現象界の因果を想ふ。想は哲學の關する所、然れども研究進て絶對に入るの時は、已に哲學を離れて智情を調和する宗教の域に入れるなり、シユラインマツヘルは智を以て哲學の域とし、情を以て宗教の世界とす。然れども吾人は此二者を調和するものにあらずんば、眞正宗教の名を付することを好まざるなり。

今や本章を終るに當り上來縷述するところを約言せんか、平等は無限なり差別は有限なり、これを差別すれば千差萬別、千差萬別なり故に有限なり、有限なるが故に服從せざるべからず、關係的ならざるべからず、不完全、不自由ならざるべからず。然り不自由なり、不完全なり、有限なり、相對なり、而して吾人は此の有限界に於て如何にすべきやを研究せざるべからず。平等は無限なり、眞如の一理天地を包容して剩りあるが故に無限なり、無限なるが故に獨立なり、絶對なり唯一なり、完全なり。完全なるが故に理想神に入る、既に神に入る、是に於てよく人生を調和し得べきなり、かく有限と無限、神と人、佛と衆生、平等と差別、智識と情感、討究と信仰、理論と實際を調和す、こゝに於てよく迷を轉じ悟を開くべし。轉迷開悟これ宗教の目的なり。然れども世界各種の宗教、多くは此の調和法に於て宜しきを得ざる者、獨り佛教は至高至大に之を調和し、よく轉迷開悟の目的を達す。無一物の處無盡藏、花あり月あり樓臺ある者、これ佛教の本質なり。請ふ聞かん。佛教の所謂人生の調和、轉迷開悟の所說如何。

宗教の目的

第二章　佛教の目的

汝は何の處より來る

道を行く人あり、問うて曰く汝何の處より來ると、彼れ知らずと答ふ、誰か其愚を笑はざらん。坐する人あり、問うて曰く、汝何の所にあると、彼れ知らずと答ふ。誰か其痴を笑はざらん。然れども、問、一歩を進めて汝は何の處より身體を稟け來ると問ひ、また汝のある所の人生とは如何なるものぞと問はんか明かに答へ得べきもの千萬人中、恐くは二三に過ぎざるべし、これ豈に愚の至りならずや、また痴のきはみならずや。螻蟻尚ほ家を知り、雁來燕歸、各々往來する處を知る。自ら萬物の靈を以て誇る吾人々類、豈其身の從來する所を知らずして可ならんや。吾人は佛教なる大問題を解するに先ち、第一に吾人は何の處より來るかといへる問題を稽査せざるべからず。然らずんば吾人も亦た何の處より來り何の處に行くかを知らざる三界の迷者となり了らん。已に述べたる如く、宇宙は平等と差別との二より成る、されど平等眞如の法性は隱れて顯れず、吾人の見て以て宇宙とする者、皆これ差別現象の世界ならざるべからず。試にこの差別の現象を見よ。山河大地草木禽獸、何者か活動なきものあらん、變化なきものあらん。滾々として河海水盡きず、花開き花落ち、雁來り雁去り、翠滴る新綠はいつか紅葉となり、變遷活動一刹那と雖、常住不變なる能はず、人生も亦た此の如し。榮は枯となり、枯は榮となり、盛は衰となり、衰は盛となり、幼は長となり、稚は老となり、一瞬と雖、定相あるなく、日々夜夜、生滅して盡くる時なし。然れども此の常相なきの萬物常に變化す、而して

成住壞空

また變化の已むときなし。既に變化なきの時なし、變化なきの一事また變化せず。變化が眞相か、變化するが變化せざるか。物質界また成住壞空の四を立つ曰く成劫の始めは空劫にして、空劫の終りは成劫と。更らに詳說すれば、衆生の業因緣力熟するが故に空中世界を成し、萬物其中に安住し、因緣力漸く衰頽するが故に世界壞破し盡して萬物また一塵あるなく、終に空となる。空また業力熟して成となり壞となり住となりまた空となる、轉々數千載更らに變るあるなし。生老病死また然り、かく相續不斷連環して無量無邊の三世に亘り、無始無終に輪轉す。釋迦所說の大小乘、實にこの業力の所感なることを決斷し以て萬劫不變の常道を示せるに過ぎざるなり。物質ありて識心あるか、識心ありて物質あるか。前后を立つる已に誤れり、已に色心の二法あり、又こゝに業

因緣生の理

力なくんばあらず。道には古今なく理には通塞なかるべし、而して此の理法は終に渝ふべからざるなり。此の理法とは何ぞ、因緣生の理卽ちこれなり。

試に一片の玉芙蓉を拈し看よ。之によつて生ずる種子なる因と土地氣候なる緣と、機熟してこの美くしき花を開けるのみ。花はこれ果、然れども更らに其因を求めんか、槖駄師も因ならん、鋤鍬も因ならん。而して一歩進めば、鋤鍬は鍛工によらずんばあらず、鍛工もまた金屬なかるべからず、水火なかるべからず、火もまた之を生ずる因緣なかるべからず、金屬もまた之を運ぶの人なかるべからず、發掘する坑夫なかるべからず、更らに、更らに進んで此の坑夫に就て見んか、衣なかるべからず、食なかるべからず、住なかるべからず、衣も食も住も自然に生ずるにあらず、例へば米、これまた種多の因緣によつて成る、

例へば材木これまた因縁生のみ、かく追尋し到れば一物直ちにこれ萬有の因縁によつて生じ、相互相待ち相倚て一も孤立するものあるなし。之れ吾人が萬有現象の社會を以て有限なり、相對なりと云ふ所由にして、此の力を以て萬有存する能はず、萬物一として形を成す能はず、それ然り何ぞまた萬有自性ありと稱し得んや。たゞこの因縁の化合、因縁の故に有なり、無性の故に空なり。あゝ有か、空か、有に非ず、空に非ず、有にあらずと雖も因縁によつて感應歴然たり空に非ずと雖も、因縁を去て實體あるなし。涅槃經に「非有非空亦有亦空」と云へるもの眞に然るものあり。而して因縁は更に因縁となり、別の果を生じ、果はまた因縁となる。故に若し此の萬有因縁の化合を觀じ盡せば執着の想なし。こゝに於て妄想萌さず、煩惱起らず、よく差別を離れて平等界に住し得べし。

非有非空亦有亦空

然れども佛教の所謂絶對なるものは、決して平等と差別とを區別し、其平等のみを指すにあらず、眞空妙有を意味するなり。眞空妙有とは有にして空、空にして有なるの謂にして差別にして平等、平等にして差別を以て本性となすなり到得還來無別事、廬山烟雨浙江潮、これ眞如（佛教の所謂絶對）の本性なり。

執着の迷見

翻つて自己が心身を視察せよ、吾人はこれ有にあらず、たゞこれ四大の和合のみ、これを離れてまた我あるなし、されどまた空と云ふべからず。人もまた因縁の力によつて出で來る者、たゞこれ假體、美と云ひ、醜と云ふ、抑も執着の迷見のみ。大なる哉、因縁の力、空間的には十方に亘り、時間的には三世に通ず、三世十方皆なその支配する所吾人もまた此の因縁の業力によつて生れ來る、業力何によつて生ずる曰く唯心の所現、請ふ少しく説かん。

心の所現

既に述たる如く、此世は差別の現象なり。差別何によつて生ずる、因縁生の理に依て生ず、事已にこれを說きぬ、而して、此の業力はこれ唯心の所現、其本性に於てまた差別あるなし、三界唯だ一心、心外別に法あるなし、金錍論に曰く、「萬法は是れ眞如なり、不變に由るが故に、眞如はこれ萬法なり、隨緣によるが故に、阿鼻の依正は全く極聖の自身に處し、毘盧の身土は凡下の一念を超えず」と、毘盧とは何ぞ、偏一切處と飜す、偏一切處なるが故に平等にして差別あるなし、所謂乾坤悉成黃金身、萬有全彰淨妙身なる者、たゞそれ心識の作用、平地に波瀾を起し、餓鬼たらんと欲せば餓鬼現はれ、畜生たらんと欲せば畜生現はる。山河言はず、大地語なし、心識見て以て山河大地とす。起信論に曰く、心生ずれば、種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅すと、此の心

佛教差別の要

許多の因縁と合し、こゝに十界迷悟の區別を成す。之を要言すれば、宇宙は、必ず其界各自の因と果とを具足するものにして而して其果體に色心の二法を該ね、其因は專ら心識の作用によるとするなり。されば心に忠孝の念なくたゞそれ貪婪無智ならんか、こゝに畜生界を現ず、深く因果の眞相を信じ佛に歸し佛を念じて能く自覺々他の願行を全せんか、この心これ已に佛界に屬するなり。哀むべし、人生猶ほ未だ自ら悟界の性得なることを知らず、空しく罪惡の巷に轉た苦惱の生活を成す。佛これを悲み、こゝに轉迷開悟の法を說き、一切衆生をしてこの迷界を脫して圓滿なる悟界に入らしめんとし玉ふ。佛教差別の要、實にこゝにあるなり。

何をか迷と云ひ、何をか悟といふ。よく平等眞如の性を悟得するを悟といひ、

四聖六凡

愛染差別の象に迷ふを迷といふ、佛家此迷悟の境界を分類して十種とす曰く地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛と、更らに約して四聖六凡といふ。烈火の中に身を苦め、呀喚の聲を放てる地獄。一滴の水、一粒の米を得る能はずして飢餓にせまる餓鬼。呑噬自ら擅にする畜生。殘害無盡なる修羅。少しく進んで名利に奔走する人間。これに天道を加へて六凡とし餘の四即ち佛菩薩、聲聞、緣覺、これを四聖とす。四者の中佛界はよく完全の悟界なりと雖も、後の三者、何れも眞理の幾分を悟りたるのみ、既にも述し如く吾人人生は悟界に屬せずして迷界にあり、たゞそれ迷界にあり、此に於てか有限差別の相にかゝり、愛着の念常に絶えず。若し夫れ此の心を排し、よく平等の理を悟らんか、こゝに於てか無限なり、繫累するところあるなし。繫累なし又た苦樂愛着あることなし、天空快濶、柳は染む觀音微妙の音、松は吹く說法度生の聲、妙機能こゝに發し、絶對の境庶幾くはそれ得べけんか。佛陀は實に此の道を敎へとし玉ひしなり。嗚呼我が身は因緣の業力によつて生じ、唯心の所現によつて見はる、佛陀の敎法を聞かずんば、何ぞこれを知らん。悲哉。

萬法は唯心の所現

第三章　佛敎の理法(上)

萬法はこれ唯心の所現、たゞそれ唯心の所現、こゝに業力を生じ、萬有の差別を成す。而して差別の萬象は因緣生なるが故に自體あるなし、自體なし只、刹那に生滅し、瞬刻に千轉萬動するのみ。狀態此の如し、故に常住不變なる能はず

遷流の狀象常に現はる。夫の吾人の認めて常住なりとする者は、餘々刹那に繼續する燈火を見て常住なる一穗の燈ありとなすが如き者。然れども、更らに更らに達觀すれば、この變化の中また一定不變常住なる現象あるを見る。これ其刹那は生滅するも燈火たるを失はざるが如き者、想ふに天地の常住なるこゝ尙ほ水の如し、たゞ業力の波によつて變化活動の象をなし、或時は小漣細波となり、或時は狂瀾怒濤となる。狂瀾怒濤ありと雖も、水にあらずと云ふべからず、小漣細波と雖も、また水なるが如く、萬有の遷流なりと雖、また常住ならずと云ふべからず、これを水波不二といふ。吾人の心識また又た此の如し、幼時の心識は今時の心識にあらず、昨日の形體は今日の形體にあらず、甚しきは朝の身體は夕の身體にあらず、一瞬前に念ふところ一瞬後に念ふところと同

水波不二

生死も亦遷流界の一現象

じからず、刹那刹那に變轉して常態常心なきが如し。而も亦た吾の吾たるを妨げず、彼の所謂生死なるものまた此の遷流界の一現象のみ。常住の上より見れば生あるなく死あることなし、たゞ現象差別の界に迷ふが故に生あり死あり、老あり病あり、これ現象は萬有の常態、色心二界の免れざる所以の者、眞如の理想の上何ぞまた生死の別あらん。凡人の眼はたゞ現象界にのみ注ぐが故に形體の散ずるを以て死となし、父母の愛念によりて來るを生とす。事相の上より見る、これ決して不可なるなし、唯だ想へ吾人の身體は生よゝ以來、常に轉化し來れる間、因緣の關係相牽引して、須臾も離るゝの時なきを、因果豈に啻に現世のみの法ならんや、優に三世に通ず、此の法三世に通ず、生もまた因果の理法によりて出で來り、死もまた之に支配せらる。其死するは現在の精神身體

に應ずべき因緣盡き、生るゝは現在の精神身體を現すべき因緣あるによる、生死たゞこれ因緣の現象のみ、業力の關係のみ、ライプニッは泰西の哲家なり、曾て生死因緣を說て曰く、

因緣の現象のみ

動物及び其他有機體は、其創始する所、實に吾人が信ずる所の如きにあらず是等は其物質機關によりて現出する以前に於て、既に生命を有するものなり即ち其死亡は眞の死亡にあらずして、生命尙ほ存し更に他の物質機關を組織して、以て其生活を再現するに至れるなりと。

言、頗る佛敎生死の解釋に似たるものあり。若しこの現象を理想の上より見んか、既にも云へる如く、無始無終より、不生不滅なり、たゞ唯心所現の業力によつてこゝに遷流の相を現し、此の識性無始の時より來り、刹那刹那に果生ずれば、因滅す、果生ずるが故に斷にあらず、生滅するが故に常にあらず。これ緣起の理の故にと云へる如く、生々世々相續不斷なり。されど、身體は心によつて發現したる現象なるが故に、其の相續近く一世に止まり、心は身體を發現する根本なるが故に三世に亘る、これ槿花は一朝の榮にして松樹は千歲の壽あるが如く業因の力によつて此の如き別を生ずるのみ。この生死二なくたゞ業力によるの理を觀じ、靈魂不滅を云ふものあり、これまた常見の徒に過ぎず、肉體因緣力の消散を見て滅とするものあり、こは斷見の輩たるを免れず。斷常二身を離れ、よく前滅后生、前滅后生の理を信ず、こゝに於て生死見るべく、六道輪廻の說解し得べし。かく前滅后生、前滅后生として念々繼續因果の關係を絕たず、其因の差によりて或は惡趣に沈みて永劫の苦痛を享け、或は善道に導

常見の徒
斷見の輩

かれて永遠の快樂を得、この間を呼んで輪廻と云ふ。習覺大師の宗鏡錄に曰く夫れ一念無明の心、眞如海を鼓動して十二緣起と成り、生死の根由を作ると、生死これ一心の上に起る現象、其の輾轉して極まりなき、物理學者の所謂眞の生なく眞の滅なきが如く、勢力保存して永劫に亘る有情輪廻して六道に生ず、猶ほ車輪の始終をなすが如しと云へる報恩品の語は最も簡明にこの道理を說けるものなり。

第四章　佛敎の理法(下)

宇宙は開發の傾向ありて毫も活動するなき能はざるものなり、而して看よ此の活動の方法自ら二種に分れつゝあるを、幼より壯に至るは進化なり、壯より老に至るは退化なり、一片の種子より長じて艶美の花を開くは草の進化なり秋風一陣吹き荒されて枯れ果つるはその退化なり、成住は宇宙の進化にして壞空は其の退化なり、言を換て云へば、有限より無限、差別より平等、惡より善苦より樂に入るは進化にして無限より有限に、平等より差別に、善より惡に、樂より苦に赴くは退化なり。而してこの進化し、退化するの間、自ら一定の規律あつて存す、之を因果の理法とす。こはこれ佛敎道理の大本、宇宙の原則自然の規律、萬法の根原なり、佛敎は實に此の上に立つ、因果の規律呼んで業力と云ふ、業力に二あり、一を無明薰習の業力と云ひ、他を眞如薰習の業力といふ。無明薰習の業力は以て退化の針路となり、眞如薰習の業力は進化の方向を執る、而して苦は無明薰習力より生じ、樂は眞如薰習の力より出づ。更に

進化と退化

業力

十界の差別に就て説明せんか、無明薫習の力によつて六凡の果を生じ、眞如薫習の力によつて四聖の果を生ず、識心もと善なく、惡なく、たゞそれ薫習の力によつて惡となり、善となる、善となるが故に樂果を得、惡となるが故に苦果を得、而して此の法三世に亙るが故に現世の善は以て未來の果となり、現世の苦はまた過去の果による。因果歴然、唯だ因縁の性と量とにより、結果に種々の等級を生ずるには至れるなり。既に現世の苦を以て過去の果とす、故に吾人今日悲慘の果を享くるもの過去業の然らしむるところ吾人また如何ともする能はず、たゞ早く未來を希ふの外あらざるなり。既に現世の苦は過去の果なれば因果の關係の宇宙に存する限り、吾人は之を遁るゝ能はず、たゞそれ遁るゝ能はず、或者は煩悶し、或者は自棄す、佛教それ或は厭世教にあらざるなきか。

引業と滿業

何ぞ然らん何ぞ然らん、請ふ聞け、吾人の前世の果を享くるに二あり、一を引業と云ひ、他を滿業と云ふ。引業とは一般不遍の性を享くるの業を云ひ、滿業とは各自特有性を享くるの業を云ふ。彼の貧富貴賤を論ぜず、均しく人たる者の悉く有する性質を受くるは、引業にして、貧富貴賤賢愚差別の性を享くるは滿業なり、滿業の上より見て悲むべきことも、引業の上より見れば喜ぶべきことあり。世には榮華の人さへあるにと吾が身の貧しきを悲む人も禽獸蟲魚に生を受くることを思へば喜ばしきなり。かく説て朱門の公子も白屋の乞兒も皆な已むを得ざる前世の果たるを感ぜしめ、其間因果の理法を説きて、今日の生活は未來の結果となることを示すが故に此世を涙の谷なり、苦の海なりとて厭ふものにあらず。此の世をして希望の世たらしめ、福利を未來に望ましむるな

佛教と道德の主眼

り。起信論に曰く、厭世死苦、樂求涅槃と、佛教道德の主眼は、因果の理法に順適し、吾人の希望する絶對涅槃の域に達するにあるなり。然りこの世を以て天國に達するの路程とす、こゝに於て此の世を以て絶望の世とせず、一休禪師が所謂門松は冥途の旅の一里塚、芽出度もあり、芽出度もなきもの、芽出度こするは未來の福利を思へばなり、芽出度とせざるは此の世の苦を思へばなり、且つや、佛教因果の理法は三世に渉る、而も所謂過去現在未來なるもの必ずしも、死前死後を意味するにあらず、今時即ち現在なり、其一刹那前は過去、一呼吸後は未來刹那々々に生滅して相互に過去現在未來となる、故に前世の因は今世の果となるのみならず、前年の因は今年の果となり、今日の因は明日の果となり、夕に朝の果を生じ、晝に夜の因を成す、佛教は之等の因果を四種に大別して之を說く。

因果の四大別

（一）順現受業　現世に業因を作りて現世に其の果を受くる者
（二）順生受業　現世に業因を作りて次世に其の果を受くる者
（三）順後受業　現世に業因を作りて三世以上に其の果を受くる者
（四）順不定受業　現世に業因を作るも其果を受くるの時定まらざる者

かく原因少ければ結果亦少なしとするの理にして、吾人は是等の大法に從て絶對に入らんとす、何ぞまた厭世を唱ふるの要あらん。咄、誰れか佛教を厭世教なりと云ふ者ぞ。

第五章　佛教の極致

涅槃

吾人は因果の理法により常に進化の道途を執る、而して其到る處、抑も何の所ぞ。換言すれば吾人の希望するところ畢竟何くぞ。吾人は迷妄の因縁によつて煩悩の支配するところとなり、日夜營々として苦界に沈む、吾人は常に快樂を望みつゝあるなり、然り無限の快樂を望みつゝあるなり。此の無限快樂の處吾人理想上の天國とし、稱して涅槃といふ。吾人は此の堺に達せんとて其道途に最も恰好せる理法を講じつゝあるなり。涅槃とは何ぞ、究竟の樂地にして佛陀の境遇なり、究竟の樂地、佛陀の境遇とは何ぞ、たゞこれ差別界上に立たる一現象のみ。眞如の上より見れば、迷悟は不二なり、有限と無限平等と差別又た殊更らに分つを要せず。涅槃はこれ眞如にあらず、故に絶對なり、無限なり悟得なるを得ん。然れども絶對には之に對する相對あり、無限には有限の限界あり、未だ以て有限と無限、差別と平等を圓滿に包容する眞如と同一に論ずべからざるなり。言を換て云へば、眞如の上には善なく惡なく苦なく樂なかるべし、之に反して涅槃は差別の上に立てる總ての惡を離れ苦を遁れたるものにして、至善至美至眞至樂なる佛陀の居住地なり。想ふに佛陀の往昔は衆生にして衆生の將來は佛陀なるが故に、衆生は進んで此の佛界涅槃の境に入らんとし、佛陀もまた衆生濟度の爲めに迷界に下り玉ふ。かく迷悟の差別現然たるも、衆生は苦樂の由來を知らず、解脱の形相に迷ひ徒らに虛妄分別の念相、痴愛差別の勢力により獨り自ら人天に迷ひ、惡極まつて餓鬼、畜生、修羅の如き境遇となり、漸く善にして天趣に赴く、人は實に極惡を解脱す、而も未だ以て究竟の樂果と云ふべからず。若し夫れ一心淸淨の境に住し、愛憎怨親の境を超え、

行ふに順逆を履まずんば、こゝに於て始めて眞正涅槃の境に住するを得ん。如何なるかこれ眞正涅槃の境、之を解くもの二あり、一を小乘的見解とす、彼れ曰く、涅槃とは斷滅の境界にして、實體もなく、意思もなき狀態即ち吾人の形體精神共に永く消滅するの謂なりと。これ小乘は身心を苦惱の根本とし、是を厭捨して六道を出過し、身心の永滅を望むより出でたるものにして人性の自然に背反し、眞理に乖戻す。請ふ見よ、人生誰か消滅を目的とする者ある、宇宙萬有何物か能く有を變じて無とする、宇宙は自然の理法によりて轉化し、人生は進化の規律によりて進歩す、曷ぞ斷滅頑無を目的とせん、大乘の旨趣に順適せるものは曰く、涅槃とは圓寂の謂なり、眞善美として備はらざるなきを圓と謂ひ、僞惡醜として滅せざるなきを寂と謂ふ。其體は恒久不易、其性は自由自在、其境は安樂平和なりと。常にして樂、樂にして我、我にして淨なり人若し進んで此の境に入れば、其智惠、其權能、其慈悲共に無限にして以て一切衆生を濟度し得べきなり。吾人の目的は此の處にあり、何ぞまた寂滅を望まん。

婆婆の教主

起信論に曰く、虛空無邊なるが故に世界無邊なり、世界無邊なるが故に衆生も無邊なりと。而して一切の衆生悉く佛性を具す、吾人豈に究竟涅槃の樂地に達すべからざらんや。想ふに古來無限の時間、無量の衆生一人の進んで此の悟界に入れるものなけん。然り、これあり、佛家之を以て十方諸佛とし、現に足跡を此の世界に垂れたるもの之を婆婆の教主釋迦牟尼佛とす、請ふ暫く佛陀を論ぜん。

既に述る如く、萬有即眞如、眞如即萬有にして谿聲山色は清淨法身を現し鴉鳴鵲噪は妙法の意を唱ふ、釋迦出生せず、達磨西來せざるも佛法大地に遍し國土山川草木禽獸一切の者、皆なこれ眞如の發現、佛と衆生と二にして不二、平等と差別と、二にして一なるが如く、一切の衆生皆な眞如の性を具すると雖たゞ迷情に驅らるゝが故に差別の相を現じ、苦惱の海に漂ふ。萬有即眞理、眞理即眞如、眞如即法身、眞理は實に法身自己の身體なり、而して偏一切處、無量無際、皆な佛身ならざるところなし、柳は綠、花は紅、これ所謂佛陀の本體なり、自ら緣起の心を放下し、見性悟道の妙處にいたり、佛體と感應し、萬有と隔てざる眞如の源底に透達し、此の身即眞如なる妙用を現し、眞如と二にして二ならざるの境に達せるものこれ佛陀の相なり。體と相とは、自然に具る、

一切衆生これを望むの情想を有す、然れども佛陀其の用を現すなくんば以て一切衆生の迷を散じ、絶對の域に進み入る能はず。一切衆生空しく高嶺の美花、望んで得べからず、益々苦み益々迷ふ、衆生を苦め衆生を迷はし、之をして安樂平和の境遇に入らしむる能はずんば、これ自覺にして覺他なきなり、自利にして利他なきなり。佛とは實に自覺々他、覺行圓滿を意味す、こゝに於て印度の釋迦、最大の理想を以て這箇の眞理を發揮し、以て佛陀の用を示し永く樂しむべからざるに樂しみ、悲しむべからざるに悲しみ、喜ぶべからざるに喜び、轉迷開悟の大道あるを知らず、徒らに夢の如く、幻に似たる浮世に漂ふの衆生を憐み、天位を棄てゝ山に入り、難行苦行一旦豁然として悟得するや、橫說竪說四十九年、佛陀をして衆生、眼に映ずるところに現し、こゝに佛も衆生と相

冥合するの道あるを知らしめ自利々他の願行を成し玉へり。通常これを法報應の三身とし、説て曰く、一の佛身の共體眞如なる邊を法身と名け、昔日の願行に酬報したる邊を報身と名け、劣等の衆生に對應する邊を應身と名く、而も三身卽一身、差異の存するあるなしと。吾人は體相用として之を論ずるのみ、豈に他意あらんや。

第六章　佛教の修業

昔時、白居易杭州に知たりし時、秦望山に鳥巢禪師といふ大德あり、長松枝葉繁茂して蓋の如くなる上に棲みけるを以て、時の人かくは名付けしなりとぞ或時白居易、山に入り師に謁して佛法の大意を問ひしに、諸惡莫作、衆善奉行自淨其意、是諸佛教と答られたり、居易、かばかりのことは、三歳の孩兒も知れる處ならずやと詰りければ、師はさればなり、三歳の孩兒も道ひ得れども八十の老人も行ひ得ぬことにこそと云はれきとぞ。佛教の修業豈に他あらんや、唯だ此の衆善を奉行し、諸惡を作さず、こゝに於て萬有の眞理を悟り、轉迷開悟の地に至るべきなり。衆生の機根千差萬別なるが故に惡の義分れて千差となり、善の意分れて萬別の修業となる。而して善惡はこれ差別現象界の區別、平等の上また善惡あるなし。然り物に善惡なく、唯だ用法如何により善となり、惡となる。毒藥も之を用ふるの法により善となり、金銀も使用よろしきを得ずんば惡となる。或人之を説て曰く、

八十の老人も行ひ得ず

煙管の譬喩

一本の煙管に於てその火門口と吸口とは相俟ち相依り同一所同一物に存在して煙管の形を爲す、若し吸口なくば煙草を口中に入るべからず、又若し火門口なくんば何んぞ煙草に火を着くることを得んや。此二者克く同一所に存在して煙管の體を全うす。而して此煙管の作用の上に於て、假りに吸口を善とし火門口を惡となす、人あり煙管を把て煙草を喫せむには、必らず吸口を口に向はしめ能く之を喫するを得、これを煙管の喫煙に於ける作用の善なるものと云ふべし、若し誤て火門口を口に入るゝときは、啻に舌頭を燒くのみならず、脂を呑み苦辛を感ず、是れ即ち煙管作用の惡と云ふべし、善惡は不二にして善の能く法性に順ずるは、煙管の吸口を口に向くるに同じく惡の法性に違するは、火門口を口に向くるが如し、蓋し善惡差別其の體全く假相にして空無の眞性を離れず、火門吸口共に煙管の體を外にして存在せざるを以てなり。

こゝ、天台大師は不二法門を以て善惡不二と談ぜられき。されど差別して說明せば、本業瓔珞經に所謂理に順じて心を起すを善と云ひ、理に背きて心を起すを惡と名くるもの、唯識論には曰く、能く此世と他の世との爲めに自他を益するものを善と名け、能く此世と他の世との爲めに、自他を違損するものを惡と名くこ。善惡の標準は、固と倫理學上緊要の問題にして頗る講究を要すこ雖も、要するに自利々他は善行にして、自損損他は惡行なるに相違なし。今試に人として行はざるべからざる十善を擧げん、四十二章經に曰く、

衆生以十事爲善、亦以十事爲惡、何等爲十、身三、口四、意三、身三者殺婬

盜、口四者兩舌惡口妄言綺語、意三者嫉、恚、痴、如是十事不順聖道名十惡是惡若止名十善行、

こはこれ儒教の仁義禮智信と云へるが如く、佛教道德の大綱にして、此の不善を行はず、此の善を修め、以て其意を淨うし、靜に迷界を去て悟界に入るは佛教の目的にして修業の要蓋しこゝにあるなり。佛教に六波羅密の行を說く、波羅密こは到彼岸の義、迷の苦界を過ぎて證悟の彼岸に達するの方法を示せるなり、請ふ少しく說かん。

一、布施、これ衆善奉行の方法にして愛他慈善の行爲を總稱す、貨財を拋て他の貧困を救ひ、又は邪說妄見に迷ふの衆生に眞理を授けて善行を奬勵するも皆な轉迷開悟の道途にして、博愛衆に及ぼし、自利々他の行爲を圓滿ならしめ、貪瞋痴の諸惡念は、常にこの修行によつて除する、彼の自ら眞理を得て、獨り之を樂しみ、財を積んで守錢の奴たるものは、決して佛果を得べからざるなり。

二、持戒、こは諸惡莫作の修行にして、佛陀の規定し玉へる法律を遵守し、一切の善を修して一切の惡を除くのこと、既にも云ひける如く、佛は自覺々他と覺行圓滿なるが故に、自己一身の利益のみを以て足れりとし玉はず、宇宙の大法により悟境に達する道途を指示し、かねては其の方法を授け玉ふ、此法に從ひて以て善を修し惡を除かずば凡夫豈に佛果を感得するの術あらんや。

三、忍辱、これは莫作こ奉行とに聯關す、難に處して屈せず、撓まざるの精神を養ひ、如何なる忍耐をなしても、作善排惡に盡さゞるべからず。嘲罵前に

加はるも瞋怒の心を發せず、情欲中に起るも貪欲の念を生ぜず、以て悪を除き善を作すべし。

精進

四、精進、たゞそれ忍辱あり、而も精進の氣なくんば以て勇氣を沮喪せん。精進以て萬難千苦を打破し、如何なる悪をも排し、如何なる善をもなさゞるべからず。釋尊が菩提樹下八萬四千の悪魔を降伏し、無漏智を發覺せられたるは實にこの精進の力と忍辱の氣によるなり。

禪定

五、禪定、こは自淨其意に必要なるものにして、以て輕噪浮散なる心を抑裁し一意專念以て一處に制し諸悪念を起さしめざるにあり、遺教經に曰く心を一處に制すれば、事として辨ぜざるはなしと、この定、以てよく神道を出す、浮動の心よく何事をかなさん。

六、智慧、智慧とは衆善を奉行し、諸悪を作さず、自ら其意を淨する所にして眞如の源底に透徹し、萬般の現象に通達し、正邪曲直を明察するの力にして、此の智なくんば、精進も忍辱も、持戒も、布施も、禪定も其の方向を錯り、徒勞に屬することあらん。智慧は六行中最も之を先とす。想ふに世間道德教育なるものもまた此の智慧を第一とし、先づ善悪の何たるを知らしめ而して後ち之を行ふの實力を養成し、而してまた德性を涵養す。佛教の修業は、此の智慧を得んが爲めに、戒を守らんが爲めに、定を得んが爲めに（戒定慧これを三學といふ）經、律、論の三藏を閲し、そが指示するところの方法により、戒定慧の三學を全うし、六波羅密を修し、以て轉迷開悟、地に達するにあり。然れども、悲哉、吾人迷妄の習慣永く染み、去る能はず、智力薄弱に道心輩

固ならず、外の障碍は内部の良心に打ち勝ち之を行ふまた至難至苦の感なき能はず、あゝ吾人は到底苦界を脱する能はざるか、其途ありこ雖、脚弱くして行く能はず、山後に勝地あるを知るも、其の山を越ゆる能はず、彼岸に悟界あるを知るも、其海を渡るべからず、此の海には船なきか、此の山には駕籠なきか、嗟、佛法宏大なり、而も凡夫の達し得べきところにあらず、否な、佛陀無限の慈悲はこの衆生を憐み玉ひ、以て他力の教義を垂れ、山には駕籠あり、海には船あるを示し玉ふ。

第七章　佛教の信仰

龍樹の十住毘婆沙論に曰く、佛法無量の門あり、世間道に難あり易あり、陸路の歩行は即ち苦く、水道の乘船は即ち樂きが如しと、佛法宏大無邊よく眞諦平等門と、俗諦差別門とを調和し、以て智情の調和を計り、自ら三藏を閲し、三學を修して主觀的に佛果に臻達せんとする聖道自力門と佛陀の大慈悲心により客觀的に佛果に臻達せんとする淨土他力門とを立つ。此二門を立つるが故に佛教は世間諸宗教に異り、又た哲學と區別し得べきなり、已に自覺覺他、覺行圓滿は佛の本務なるが故に、其覺他の願行を全うせんとて、其智庫を開き、悲海を飜して一大方便を案出し、自己の果號即ち佛名の中にあらゆる二利の願行を罩蓋し、之を普く衆生に付與して衆生罪苦の身心をして纎介の造作を加へしめず、立地に佛因を成就せしめんとし玉ふ。煩惱即菩提、生死即涅槃、佛名を稱するの心は絶對にして些の惡念なし、些の惡念なきこれ佛の心なり、

たゞそれ此一刹那而も佛の心を得、念々唱名豈に佛果を得ざるの理あらんや、無量壽經に曰く、其有得聞彼佛名號、歡喜踊躍乃至一念、當知此人爲得大利、則是具足無上功德と、東台の慈等師嘗て念佛の理を示して、佛は本より絶對法界妙なる理の現れ玉ふなり。我が念佛の心も本より絶對法界妙なる理なり、されば一心に念佛して不亂なるに到りぬれば、餘の一切の心念なく、唯だ念佛のみ現れけり、我が本絶對法界の心、絶對法界の佛と一合して、唯一の法界と現れなば何こて悟の開けざらんやこ、簡にして盡せりと云ふべし。淨土門は、佛陀の教旨中最も簡易なるものなり。こゝに於て人、多く疑ふ、然れどもこれまた因果の理法を解せざる痴漢のみ。我れに此の簡易の法あるは、佛陀に大困難の原因ありしによる。迷悟は不二なり、生滅は一如、佛陀が修業の功によりて覺明遍照十方世界の時、他力の教門を以て我等を救ひ玉ふは、眞諦平等の理を俗諦差別の上に應用し吾人をして理論と信仰との二者を圓滿ならしめ玉ふなり更らに此の二門を較せんか、彼れは智慧により、此は情感による、彼れは理論により、此は信仰による、彼は平等の理を一心に歸して差別の想を忘れんとし此は自己を佛陀の願行に歸し、內界の平等を忘るゝにあり。聖道は成佛の遠果を朔し、淨土は往生淨土の近果を期す、たゞそれ成佛の遠果を期するが故に衆善萬行尙ほ足らず、たゞそれ往生淨土の近果を望む、こゝに於て一念一行を以てこれ足れりとす。更らに換言すれば聖道は先づ平等の理を看破して差別の相に赴き、淨土は差別の俗界に即して平等の界に入らんこするもの即ち淨土門とは此身を罪惡の穢身こし、此土を濁惡の穢土こし、生佛一如の見識を捨て自力

の修業を須ひず、偏に佛陀の他力に托して彼の淨土に往生せんとするにあり。淨土とは何ぞ、これ佛陀が衆生無明の薫習によりよく此世に於て迷妄を斷じ能はざるを察し玉ひ、莊嚴美麗最も善を成すに恰好なる境界を十方の中に立て玉ひしなり。「わけのぼる麓の道は多けれど、同じ高根の月を見るかな」大乘起信論に左の文あり、よく淨土門の梗概を示す、こゝに之を擧げて本章を結ばんとす。

衆生初て是法を學し、正信を求欲するに、其心怯弱なり、此娑婆世界に往するを以て、自ら常に諸佛に値て親承し、供養すること能はざることを畏れ、懼れて信心成就す可きこと難しと謂つて、意退かむと欲する者は當に知るべし。如來に勝方便有て信心を攝護す、謂く專意念佛の因緣を以て願に隨て他方佛土に生ずることを得、常に佛を見て永く惡道を離る、修多羅に說くが如し、若人專ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念ず、信ずる所の善根廻向して彼の世界に生れむと願求すれば、卽ち往生することを得、常に佛を見るが故に終に退あることなし、若し彼佛の眞如法身を觀じ、常に勤て修習すれば、畢竟して生るゝことを得る、正定聚に住するが故に。

と、修業と念佛、他力と自力、聖道と淨土、先天的宗教思想と顯示者理論と信仰、智織と情感、圓滿に調和して眞の宗教たり、佛教其門多く其說多端なりと雖も、其要また之に過ぎざるなり。

第八章　佛教の歷史

釋迦は佛教の教主なり、教主出でざるも佛教大地に遍し、社會は進歩の理法に制せらる、理法は釋迦を生む又偶然に非ず。少しく說かん、始めアリアン人の中央亞細亞より印度の地に入るや、自然の境遇山川の狀態は、彼等をして敬虔の念を深からしめ、此の間「ヴェダ」教を出し、婆羅門教を出し、火天、地天、水天、風天、大梵天、帝釋天、毘沙門天、羅刹天、日天、月天等を拜し、苦因を以て樂果を得むとし、地論、火論、口力、服水、風仙、無因、蓋方、時論聲論等の客觀的哲學、非聲論、識論、阿賴耶論さては能執、所執摩納波、常定生、袖特伽羅等の主觀的哲學あり、抽象無形、理益々進み、迦毘羅の數論となり、憂樓法の勝論となり、勤沙婆の尼犍子論となり、相互城廓を築き門戸を張り、論難攻擊宛も是れ戰國群雄割據の狀、干戈倥偬、相攻め相討つ、此時に當りて釋は英邁迦の才、卓磊の量を以て諸宗教、諸哲學を統一し、こゝに佛陀無上の法門を發揮し、慈眼一切衆生を度せんとせり。

抑も釋迦は、前印度「カビラハス」國王ストダナの子、母は摩耶、日本紀元前六百六十七年、周の昭王二十六年甲寅四月八日を以て生る、幼にして溫順恭敬、學を國中の碩儒に受け、長じて聰明敏達、軀幹勇壯、膂力人に過ぐ。始め釋迦の生るゝや、占士あり謂て曰く、此兒必ず佛陀たらむと、王之を惜み、世間的憂苦を知らしめざらんと欲し、四時の宮殿を造り、秀潔なる庭園には、佳本奇草、珍禽異獸を蓄へ、侍するに麗姫あり、食するに美肉あり、十六歲の時、首布羅不駄王の女、ヤソダラを配し、太子の快樂をして層一層深からしめむとせり。然れども釋迦心を高妙玲瓏の地に置き、融々たる春光、喃々たる鳥語、

太子の出家

以て樂しとせず、一旦老病死の苦を見るや、衷心懊惱、人間苦痛の原因を探究せむと欲し、一夜更闌け人靜かなるの時、飄然愛馬に跨りて宮殿を出で、自ら「ウラウエラ」の山林に入り、隱者を訪うて人生最大眞理を探らむと欲し、難行苦行、沈思斷食、而も其希望を果す能はず、去つて「ブグガヤ」に赴き、邪念を去り思を凝すこと多時、身心疲勞終に昏迷地に倒るゝに至れり。是に於て釋迦身體の疲勞は、以て心性の開發を致す所以にあらざるを悟り、貴女の惠により食物を得、更らに手に鉢盂を携へ、「ニランジヤアラア」河に浴し、口腹充ち氣力舊に復するを待ち、再び森林に入り、以て希望の智識を得んと欲し、端然菩提樹下に坐し、誓つて曰く、道若し成らずんば此坐を去らずと、其夜釋迦は無漏の妙智を發得し慾念を斷滅して蓮華の天明に開發するが如く、こゝに前人未だ發せず、後人庶幾し得べからざるの一大眞理を發見せり、是れ實に娑婆世界の教主釋迦牟尼世尊なりとす。

第一華嚴の時

世尊の刻苦既に六年、一旦豁然として眞理を覺得するや、山を下り寂滅道場に於て唯一大乘の法を說く、之を第一華嚴の時と云ふ。其後鹿苑に於て因緣所生の說を明し、說敎十二年、四阿含等の小乘を說く、之を第二鹿苑の時と云ふ

第二鹿苑の時

而して更らに淨色觀經、無量壽經、楞伽經等を說く、之を合して第三方等の時といふ皆な所謂大乘なり。然れども、其實は大小兼學の敎にして唯一大乘にはあらざるなり、其後十六會上に二十二年間唯一大乘を說く、之れを般若の時と云ふ、終りに世尊其本心を明にして法華はこれ實に佛敎精華の萃るところにして唯一大乘なり、これを第五時と稱す。世尊四方を遊說し、敎旨を述べ、

第三方等の時

般若の時

第五時

教化を施すこと五十年、蓋世の識を以て諸哲學を論破し九十九歳の高齢を以て沙羅双樹の下、數多の子弟に圍繞せられ、悲鳴慟哭の中寂然として涅槃に入れり。

世尊の教門八萬四千、其理幽玄高妙なりしかば、佛滅後百年の頃迄は、佛教甚だ盛ならず、婆羅門教は依然として其の勢力を逞せり。然れども、寶玉永く土中のものにあらず、佛教豈に永く隱れてやまんや、滅後百年より四百年に至るの間小乘別れて上座大衆の兩部となり、兩部別れて十八部となり、異論百出紛擾極りなく、世親菩薩の俱舍論となり、訶梨跋摩の成實論となり、大乘も亦た氣息奄々の中より立ち來り馬鳴菩薩の起信論となり、龍樹菩薩の大無畏論、中觀論、十二門論、大智度論、大不思議論等となり、更らに彌勒菩薩の瑜珈師地論、分別瑜珈論、辨中邊論、金剛般若論、莊嚴論となり、無着菩薩の攝大乘論となり、世親菩薩の淨土論、佛性論、法華論、涅槃論、十地論、二十唯識論等となり、大に大乘の數理を發揚せり。然れども當時小乘の勢ひ甚だ強く、大乘の盛なりしは、僅に中觀瑜珈の兩宗に過ぎざりしが如し、南海寄歸傳に、

竺土大乘不過二宗、一則中觀一則瑜珈、

と云へる、以て徵すべきなり。

此時に當りて佛教業に已に葱嶺を超え、流沙を渡りて支那に入り、滅後一千十六年後漢明帝永平七年、金人を夢みてこれを求めたるに會して大に傳播し、西域、沙門續々佛經を齎して支那に入り、支那の僧亦た印度に入るもの多く、

羅什玄奘、眞諦、法顯等の徒、輩出し經典多く飜譯され、帝王も亦たこれを贊翼し、光彩燦爛佛教の精華を現し、或は印度より傳はり、或は此國に於て義を立て佛經を本據として漸次弘布し、分れて三論、成實、涅槃、地論、攝論、倶舍、天台、律、淨土、法相、華嚴、眞言、禪の十三宗となれり、其中倶舍成實二宗は、小乘有空兩宗を代表し、三論法相（大乘）と共に印度より傳來せるものにして餘の九宗は支那に於て義を立て宗を分ちしものなり。殊に天台、華嚴眞言等に至りては佛教の眞理益々開發せられ、直指人心教外別傳の禪は、支那人士の好尚に投じ佛日大に光を加へたり。印度より支那に入り這の光彩を添へたる佛教、更らに轉じて東方日出るの國に入れり。

史稱す、世尊滅後一千五百〇一年、我が欽明天皇十三年冬十月、百濟王始めて佛像經卷を日本に送る、これ我國佛教あるの始なりと。（今日に於ては水鏡等を據とする說用るら）此の佛教は、當時熱望せる國民の宗教的觀念と合し一大勢力となり、其後僅かに八十有餘年にして寺既に四十六、僧八百十六、尼五百六十九人あるに至れり、此時代の佛教は、神道又は儒教の如き淺薄なる教育を受けし人民にはいと珍しき理を有するものにて八不の正觀を凝し、生死の論を斷じ、一代の諸教に於て淺深を論ぜず、唯一理なりと執る三論宗は、惠觀、推古天皇三年に之を弘め、解深密經唯識論を所依とし、三界唯心を以て宗意とし諸法の體相を明かす法相宗、孝德天皇の四年に傳へられ七十五法を以て法相とし、四諦を以て入理とする倶舍宗、訶黎跋摩の成實論に據りて宗を立て、人法二空を明すを以て

宗教とする成實宗、此二は共に小乘教にして一は有宗を顯し、他は空部なり。其他華嚴經を所依とし、十玄六相の妙義を說て法界差別の事相相卽し相融するこゝを示す華嚴宗あり、律宗は進で唯識圓教に接し、三學圓融無碍の妙行ありとし、各自獨立して幽玄を競ひき、之を南都の六宗と云ふ（今まだ獨立を失ひ獨り華嚴法相二宗の僅少なる末寺を以て立つあるのみ）而して桓武の遷都は首府の佛教を一變し、南都六宗の時代をして台言二宗の時代となさしめたり、台言二宗とは最澄によつて開宗せられたる天台、空海によつて弘通せられたる眞言をいふものにして、一は法華を以て本經とし、智度論を以て指南とし、涅槃經を以て扶疏とし、大品經を以て觀法とし、一心三觀の妙理を明にするものにして後世分れて延曆、園城、西教の三派となる、他は大日經、金剛頂經、蘇悉地經等を所依とするものにして、所詮の妙要は、三密相應して卽身成佛を談ずるにあり。三密とは手に印契を結ぶ、口に陀羅尼を誦し意に阿字本不生の理を觀ずるを云ふ。新古の二派あり、新義、古義と云ふ、台言二宗は平安朝に於て勢力を得、共に貴族的を以て相互盛なりしが、世は太平に慣れて奢侈を生じ、地方の豪族干戈を動かすに當り、台言の二宗は高尙にして且つ貴族的なる難行道は漸次人心に適せず、易行の法門代り起りて衆生を救濟せざるべからざるに至り、第一に大原の良忍法師融通念佛宗を唱ふ、此の宗は一切の功德融通して彌陀の名號中に攝在するの義を取るものにして往生成佛の要法、唯だ念佛を修するにありとし、我唱ふるところを衆人に融通し、衆人の唱ふるところ亦た我に通入するもの、之に次で源空身を天臺より起して普く大藏の奧義に通じ、深く感ずるところありて、專修念

佛の宗を唱へ、無量壽、觀無量壽阿彌陀の三經を所依とし、無量壽佛を專念して往生淨土を期するもの、後世鎭西、西山、長樂寺、九品寺の四派に分る、次で淨土門中一新紀元を開きたる眞宗、親鸞によりて、立つ眞宗は他力回向の信心を以て往生淨土の眞因とし信後相續の稱名を以て佛恩報謝の行業とし、肉食妻帶を許す、十派あり、本願寺、大谷、佛光寺、高田、木邊、興正寺、出雲路山元、証誠寺、三門徒なり。此時に當りて我が優柔に流れんとする佛敎界に一種の活氣を以て入り來れる宗旨あり、稱して禪宗と云ふ、此宗二あり、先なるを臨濟と云ひ、榮西によつて傳へられ、後なるを曹洞とす。道元によつて唱へらる、凡て禪は敎外別傳見性成佛を主とする者にして他宗の如く區々經文に據らず、臨濟に十派あり、天龍、建仁、東福、相國、南禪、妙見、大德、建長、圓覺、永源なり、曹洞、本寺を永平總持の二とす、後光明天皇の朝、明の黃蘗山隱元禪師歸化し、別に黃蘗一派の禪を弘む、之を黃蘗宗と云ふ、此の宗は武門の間に好遇せられ、北條足利兩時代に於て敎界の大立物なりし、これより先き建長五年、日蓮、英邁の資を以て諸宗を折伏し、且つ其要を取て調和せしめ、天台の敎相、眞言の事相、往生淨土の易行道、さては禪の活氣までをも交へて日蓮法華宗を唱ふ、此の宗は、立正安國を以て所期とし妙法蓮華の題目を唱ふれば、寂光の妙土を感得し、一生成佛の本懷を遂ぐとす、一致勝劣の二流あり、勝劣には妙滿寺、興門、八品、本成寺、本隆寺の五派分れ一致にて單稱日蓮宗と不受不施と不受不施講門との三派あり、其他一遍によつて開宗せられたる時宗あり、毎夜六時に善導大師の往生體讃を修し、要は念々相續して念々往

生すと云ふに在り、かくて世はかりこもの亂れに亂れて、寧日なく、耶蘇教は西班牙、葡萄牙より羅馬法皇の使命を帶びて來り、これに佛法との一大衝突を來したりしも、德川氏鎖港の政略は、この憂を拂ひて僧徒を昏臥せしめ、一轉して神道との衝突、儒教との軋轢となり、王政復古と共に又もや耶蘇教との衝突となり、教理組織一變せんとする時ではなりぬ、而して最澄出でず、空海出でず、源空親鸞日蓮、出でず、榮西道元の徒未だ起らず、新佛教の聲、果して何の處にか響かんとするや、耳を峙てゝ待つこと久し。

修道講話 終

昭和二年二月三日印刷
昭和二年二月五日發行

修道講話＝奥附
定價金壹圓參拾錢

不許複製

著作者　加藤咄堂
發行兼印刷者　東京市神田區今川小路二丁目十四番地　高倉嘉夫
印刷所　東京市神田區今川小路二丁目十四番地　忠誠堂印刷所

發行所　東京市神田區今川小路電話九段一九五八番　振替東京二〇四三一番　忠誠堂

文學博士　幸田露伴著

努力論

三五判洋布裝函入
五七十四頁
定價金貳圓
送料金十二錢

努力して努力する、それは眞でない努力を忘れて努力する、それが眞のよいものであるとは著者の序文の一節である、蓋し本書は博士が多面なる半生の經驗を基礎とし該博の蘊蓄を傾倒して、人力と運命の關係から如何にして自己を革新するかと云ふ點を述べ幸福を招致すべき、三大哲理と成敗利鈍禍福榮辱の因て來る原理を喝破したもの數十版を賣り盡して高評更らに一層である。

目録

運命と人力　着手の處
惜福の說　分福の說
努力の堆積　修學の四標的
接物宜從厚　四季と一身と
靜光動光　凡庸の資質
附錄五陽明の教訓　疾病の說
進潮退潮　氣山下語

加藤咄堂著

修養論

三五判　クロース裝
五百三十餘頁函入
定價二圓
送料十錢

修養は人生の一大事也、常に心を修養に存する者は向上し、怠る者は墮落せざるを得ず。修養あるは實に吾人人類の恩寵にして、又畢世の一大義務也、然かも新しき時代には新しき人物を要し。新しき人物には又新しき修養を要す。乃ち先生の此著あゝ所以にして、古今に徹し、東西に亘りて、倫理、宗教、哲學等の諸家の深奥を討尋し、且つ偉人先哲が立志奮勵、以て人格鍛錬に努力せし、各種の熱烈悲壯なる逸話史蹟を博引して圓融陶冶、玆に新たなる修養法を建設せられたるもの、從來江湖に散存せる空想的成功術の類に非ず、之れを小にしては齊家處世の妙契を悟得すべく、之れを大にしては宇宙人生の大目的に暝合すべし、眞に吾人が修道の唯一路にして、又向上自覺の好針砭たり。

文學博士 前田慧雲著

日本佛教の大系

菊判クロース裝
三百五十頁函入
定價二圓
送料十錢

日本佛教を經とし、修養と信仰とを緯として織出されたる一編にして、その說く所極めて平易、通俗佛教の素養なき人にも一讀了解し得ると同時に讀者を導いて三世の迷妄を打破し理智冥合の大信仰地に到達せしむる良著也

目要

心の落付　宗教の本旨　佛教現象論
常樂我淨　無限絕對　煩惱即菩提
世間即佛法　裸行上人　觀音と彌陀
死に就ての修養　正義と忠孝　差別中の差別
大乘圓頓戒　空也上人　源信和尙
親鸞聖人　其他數百章

文學博士 前田慧雲著

信は力なり

三五判函入
三百八十頁
定價金壹圓三十錢
送費金八錢

信は力なり、心を治むる力なり、身を修むる力なり、家を齊ふる力なり、天下を平にする力なり、語を換へて之を言へば、生死を超斷するの力なり、倫理を實踐するの力なり、民心を調和するの力なり、殖産興業を振作するの力なり、又此力は敵軍を攻擊するに於ては機關砲よりも大なり、要塞を破壞するには、攻城砲よりも猛なりと、學德兼備の博士の所說をきいて、各人よろしく大勇猛心を養ひ、以て濁世の波を踏破すべきにあらずや。

要目

道具に負る勿し　本心を養へ　無邪氣なるべし
溫古知新　雅懷を養へ　現在を樂め
讀體玩味　厚面の修養　食はずぎらひ
無盡の寶庫　知足安分　山林の樂
漸進士義　情的修養　說教を學べ
法界は皆道　其他數十章